圍棊獨習 第貳卷

795.
Su882i6
W

贈寄
瀨越憲作殿

國立國會
38.8.14
圖書館藏書

617885

圍碁獨習第二卷目次

基礎篇（その三）

著手の要領……（一）
善い手と悪い手とを知る簡單な法……（一三）
切……（一八）
凝……（二三）
切と凝の比較……（二七）
正しい形……（三二）

死活篇（その三）

死活に就て……（三六）
死の部……（四六）
活の部……（五二）

地取篇（その一）

地について……（五六）
地になる形と地にならぬ形……（六〇）
死活と地の關係……（六四）

死活篇（その四）

死……（六八）
活……（七二）
攻合……（七六）
死活練習……（八二）

二十五目實戰

地取篇（その二）

地と駄目……（八九）
有効な駄目……（九二）
攻合と駄目の關係……（九四）
終局に於ける駄目と地の作り方……（九六）
七筋の盤の對局法……（一〇〇）

——第二卷目次終——

圍碁獨習　第二卷

七段　鈴木爲次郎

基礎篇

着手の要領

盤面に向て相互に着手する間には、石は接して戰となり、其處に色々の變化を起すも、當然の成行であります。

で斯樣に石は接して戰となつた時に、扨其次の着手は如何云ふ意味で打てば宜いかと云ひますと、之に二つの大切な要領があります。

それは第一卷で說明致しました、石の活力と、行尖飛の活用でありまして、若し此二つを巧みに活用する事が出來たならば、何んな難解の形でも容易に解決して、すら〳〵と着手する事が出來ま

す。

て石の活力の應用については、次の説明にゆずるとして、先づ行尖飛の用ゐ方について研究致しますと、先づ行の意味は前に述べた通り、石を確に連續しながら、打進む極く堅實な手でありますから、此形は、敵の優勢の場所とか、或は極く確かに打進んで行かふとする時、用ゆるのであります。

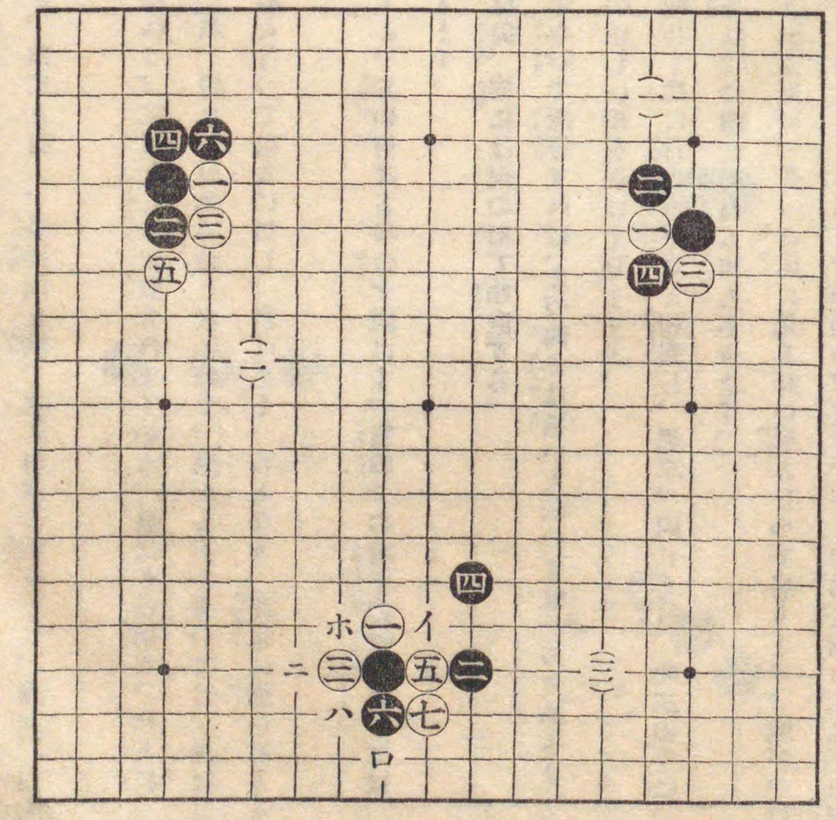
次に尖の形は、行と異つて斜線に進む手でありますから、若し敵味方、石が入り亂れてある時は敵に斷ち切らるゝ事もありますから、此手は我勢力の優つて居る場合、或は強く攻めようとする時用ゆる手であります。

飛に至つては、石が一路或は二路、三路と離れて居りますから、之れは何時でも敵に切らるゝ手あるを豫期し、互に石が離れてある場合とか、或は單獨に打つ時に用ゆる手で、前の行尖の樣に彼我の石接しての後では、決して打たぬ手であります。其例を擧げて見ますと

第三十一圖　（一）について見るに、初め白一にツケたとして、扨此時、黑は前の行、尖、飛の中、何の形で應ずるのが、善いかと云ひますと、若し周圍の形勢優れる場合（例へば二十五目或は二十目置碁など）は、圖の樣に、黑二と尖の形で綽ね、次に白三、黑四に切違つて、強く戰ふのが

處が、味方の勢の弱い場所では、（二）の樣に、黑二と行の形で應ずるが確で、次に白三と押せば、黑四に行、白五黑六に曲る、と云つた樣に、確に石を連續しながら打つのが宜いので、斯う行の形で打てば、形は堅固で、少しの紛れもありませぬ。

次に飛の形は、前に述べた通り、石が互に接した時打つ時は惡手となるので、其一例を擧げて見ますと、（三）、白一と附けた時、黑は行或は尖の形で應けなければならぬの



基礎篇第三十一圖

を、之を二と飛で應けたとしますと、白三と打ち、黑猶四と飛、次に白五に當りとし、黑六、白七となります。

此時黑イに切れば、白にロと打たれて、二目を征で取られますから、黑はイの切で、ハと打つて此二目を助ける外無く、白はイに粘、黑ニ、白ホの粘となるので、斯かる形となつては、黑は二四及び六、八、ニ等の切れ切れの形となつて居るに對し、白は全く一石となり、非常に強い石となります。

第三十二圖　前の説明で見ますと、其如何なる場合を問はず、實戰での着手の要領としては、左の一つを最も大切とするのであります。

先づ行の形では行で應け、尖には尖、飛には飛の形で相應ずる。

之が一番宜いので、着手は常に此心得で應答すれば、先づ間違は無いと云つて宜いのであります。

で次に、一般に見る行、尖、飛の正しい形を掲げて見ますと。

(一)、黑一と行びた時は、白も同じく二に行の形で之と相對し、黑三、同じく行、(此三の手は、斯樣に白二手に對する黑二手の場合は時に四に綽ねる事もあります。)

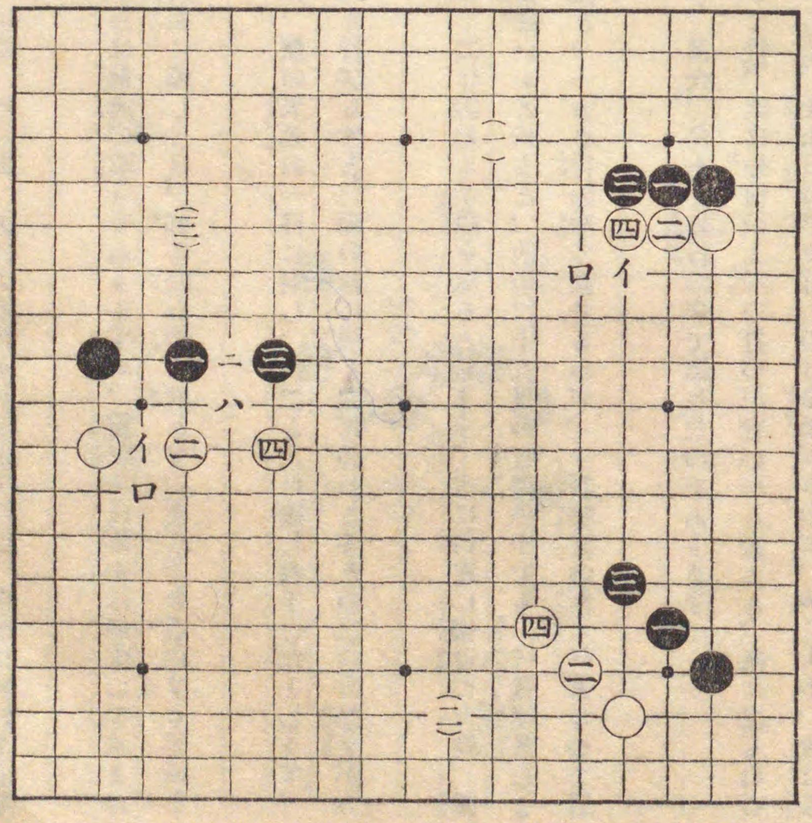
次に白四に押となつたので、斯う云ふ形が、先づ普通に見る好い形となつて居ります。處が、白四でイに尖むとか、又はロに小斜走に飛ぶなぞの手は、變則の打方で、多くの場合斯う云ふ手は惡

手となるのであります。

(二)は尖で相對した形で、圖の樣に黑一に尖めば、白も二に尖むを普通とし、又黑三に對し、白四に尖むので、之も普通見る形であります。

(三)は飛で相對した形で、圖の横に白○、黑●と、一路隔てゝ對した形では、黑は一と一間に飛ぶを普通とし、白二に飛、黑三白四と一間に飛ぶのが、普通見る形で、又之れが一番良い應手であります。

處が白二の手で、イの行、



基礎篇第三十二圖

又は**ロ**の尖を打つとか、又は黑**三**の手で、**ハ**の尖、又は**ニ**の行を打つとすれば、之等は何れも着手が重復し惡手となるのであります。

第三十三圖　行、尖、飛の用ひ方は前述の通りでありますが、實戰では形勢は變化して止まぬものでありますから、此變化する局面に處しては、機に臨み變に應じて、此三つを活用する手段を知らなければなりませぬ。

一例を擧げて見ますと、圖の樣に、黑の天元の一目に對し、白**ニ**と之に接し着手したとします、斯かる時は、前述の樣に黑は堅く**三**と行びる手と、圖の樣に强く**二**に綽ねる手との二つの應手があります。

で此處では黑先着の効を持し、强く**二**に綽ねる手段を取るとします。次に白**三**に切違つた時、黑は此切違の形で如何應ずるのが一番善いかと云ふと、前の二十五目の實戰の中でも一寸說明致しましたが、斯かる切違には圖の樣に四と、一方を行の形で應ずるのが、一番堅實の良着となつて居ります。

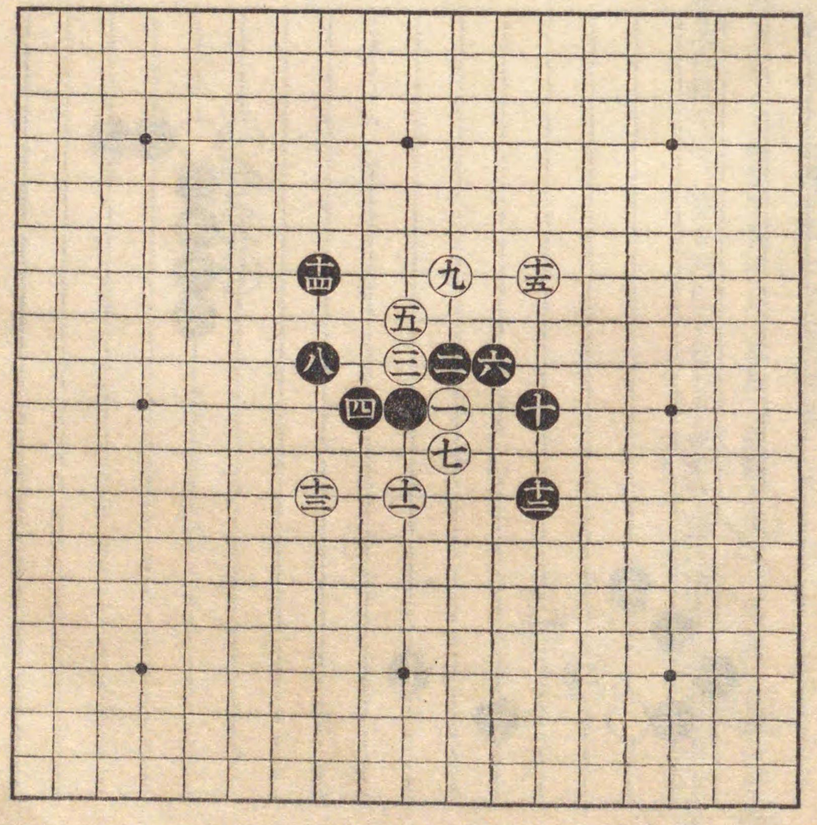
白も次に五と行の形で黑と相對し、黑**六**、白**七**と皆行の形で應じたのであります。

扨斯樣に二目づゝ、互に行となつて後、次は如何云ふ形で打つが宜いかと云ふと、既に黑も白も**四**、五、六、**七**と石が離れて來てからは、此上行の形で打つのは堅過ぎるので、少くも尖、或は飛で應ずるのが宜いのであります。

故に圖の樣に黑は**八**と先つ尖で應じ、白も**九**に尖、以下黑**十**、白**十一**と尖んで中央に發展したのであります。

扨一旦石が離れてからは、我から進んで敵の石に接して打つのは、多く不利でありますから、今度は圖の樣に、黑**十二**と一間飛、白も同じく**十三**に一間飛、黑**十四**、白**十五**と、共に一間飛の形で相應じたのであります。

斯樣に形は時々變化するも

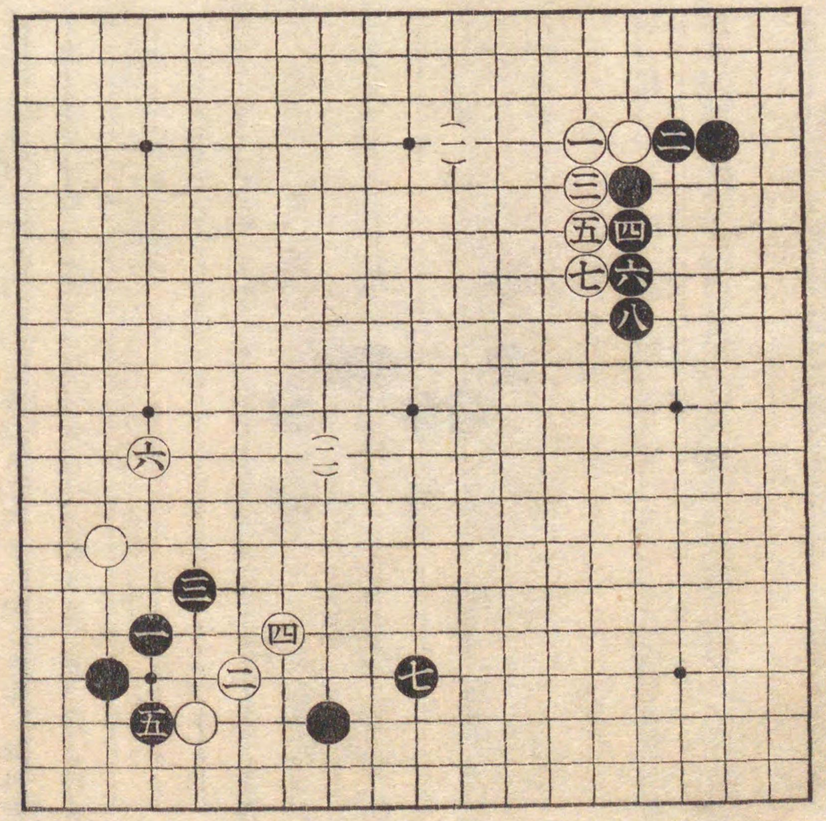


基礎篇第三十三圖

のでありますが、大要は前述の通り、彼の接した石が行の形なれば我も行、彼が尖の形なれば我も尖、又石が離れて彼が飛の形なれば、我も飛と之に相應ずるのが一番善いのであります。

第三十四圖　猶茲に普通隅に出來る定石の形で行、尖、飛の應答を研究しますと。

（一）、白一に行びれば、黒も二に行の形で黒●●を連絡するのが一番良い應手であります。次に白三に曲れば、黒四に行び、白五、黒六、白七



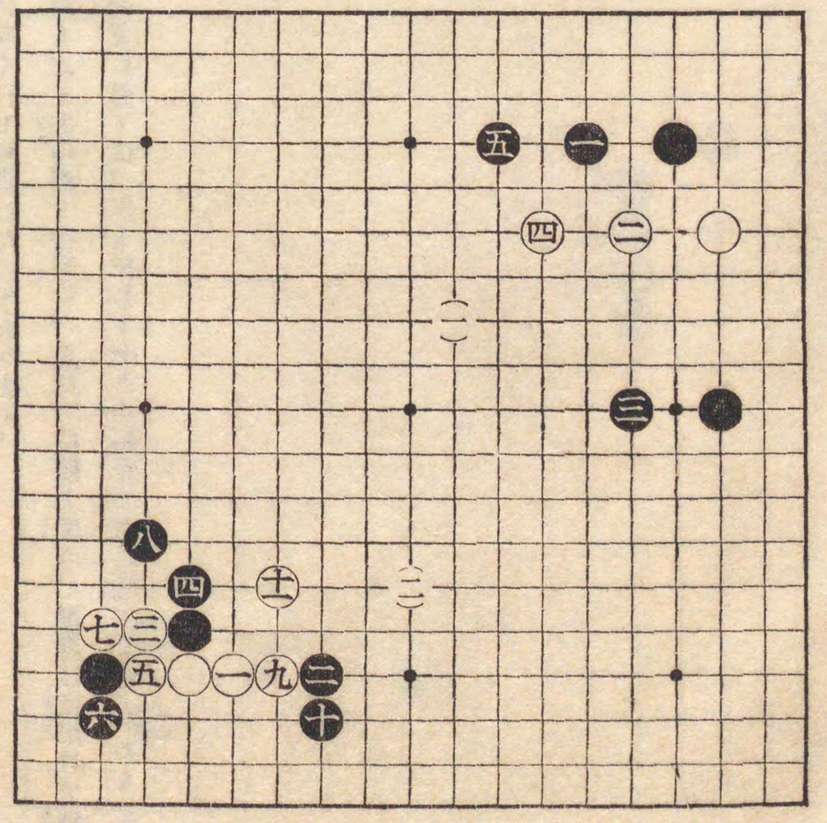
基礎篇第三十四圖

黒八と打つたので、之迄は白黒共に斯く行で相應じたのであります。

（二）の様に、黒一と尖めば、白も二と尖の形で發展し、黒三、白四と尖み、黒五に尖附けて隅に根據を作り、白次に一路離れ小斜走に打てば、黒も同じく七と小斜走で之に應ずるのであります。

第三十五圖　（一）黑一と一間に應け、白も同じく二と一間に飛、黑三白四、黑五と共に一間に飛んだので、之も置碁の中、一つの定石であります。

（二）此圖は白は正則に應じ、黑は不規則に打ち、行、尖、飛の用方を誤つた爲に、石を三つに隔てられた、最黑の形惡しき一例であります。初めに黑二は大惡手であります。此手は前圖にある樣に、五に突當る行の形で應じなければならぬ處を、斯く飛離れて打つた爲に、次に白に三と綽出され、黑四、白五となつて、先づ石を隔てられ。以下黑六、八、十まで、皆連絡の無い石を個々に動いた爲に、白十一までの結果、黑は石を三分せられ、之に對して白は一石となり此三つの黑を攻められる非常に惡い形となつたのであります。（切凝の部參照）



基礎篇第三十五圖

善い手と悪い手とを知る簡單な法

局に向ひまして互に一着づゝ下す毎に、局面はだん〳〵發展し、變化するので、其間には色々な難解の形に遇ふものであります。

斯かる時に當りまして、一々其着手の善惡を判別し、適當の手段を講ずるのは、大に熟練を要するもので、又非常に困難と云はなければなりませぬ。

從來ありふれた多くの碁經では、之れの説明を試みたものは殆んど無く、只其評に「白斯く打つべし」、「黑斯く打たざるべからず」と、單に抽象的説明を爲すに止まりて、何政斯ふ打ち、又如何云ふ理由で斯ふ打たなければならぬかを、具體的に説明したものは殆んど無いと云つて宜い位であります。

故に折角碁を研究せられんとするに當りまして、若し以上の方法で無意味に此手善し、彼手惡しと覺へたのみでは、徒に勞多く、効は甚だ少いと云はなければなりませぬ。

而かも碁は千變萬化、毎局同形のものは殆んど無いと云つて宜い位であります、其變化窮りなき局面の研究を、只一少部分の場合に限られた、善手、惡手のみを知るのでは、實戰に當り若し外の異つた形に遇ふ時は、直ぐ應答に迷ひ、折角の研究も何の役にも立たぬものとなつてしまひます。

で此處には、以上不規則な説明によらず、組織を立てゝ研究の順序を定め、次に場合に限られた善い手、惡い手を廢し、一般に適用せらるゝ通則を定め、之によりて研究を進めようと思ふのであります。

で先づ局に向て石を配置しようとする時、又は敵地に入らふとする時、或は石と石と接して戰となつたと時に如何云ふ方法で着手したら宜いかと云ひますと、茲に一つの簡單な方法があります。

若し此方法によりて、着手の善惡を考へたならば、如何な變化した形でも、其場合に應ずる善い手を知る事が出來ます。で此方法とは、一卷で説明致しました着手の活力を基とし、其活力を巧みに活用するのでありまして、之れには左の三つの場合があります。

一、單に其打つ石の活力のみを考へる場合。

二、全局の連絡せる石の全體の活力を考へる場合。

三、彼等の石の活力を仔細に分析し、其中で一番有効な場所に着手する場合。

此三つであります、で之等の詳細な説明については、稍難解の點もありますから、卷を重ぬるに隨ふとしまして、此處には先づ、石と石と接した時單に其打つ石の活力の活用について説明する事と致します。

即着手の善惡は、之を一言で盡しますと、彼我の石接し、戰となつた時、次に下す手は、

味方の石は連絡を取りながら、其一手の活力を成るべく有効にし。敵の石に對しては、其連絡を絶ち其活力を少なくする。

ので云ひ換へて見ますと、石は常に共同し、敵の弱點を衝いて進む、只此一方法が最善いのであります。

第三十六圖　(一)、黑二目が一間飛になつて居る形（此形は互先の布石で、出來る一間締りであります）、で此形の時、假りに白が一と接して來たとします。此時黑は如何應ずるのが宜いかと云ひますと、此附に對して、黑は前に說明した行或は尖の何れかの中で應けるのでありますが、此中假りに黑イの粘で應けたら如何かと云ひますと。

此手は、黑自身連絡を保つ手としては、定全無缺でありますが、然し餘り堅過ぎる手、即白の活力を少くする手となつて居りませぬ。まして此形勢では、初めに黑二目も先きにある處へ、あとから白一に附けたので、次は黑の手番で、つまり黑三着に對する白一着と云ふ、大に黑優勢の場所でありますから、此時黑イに粘ぐ手は、餘り働きの無い、所謂ヌルイ手と云はなければなりませぬ。

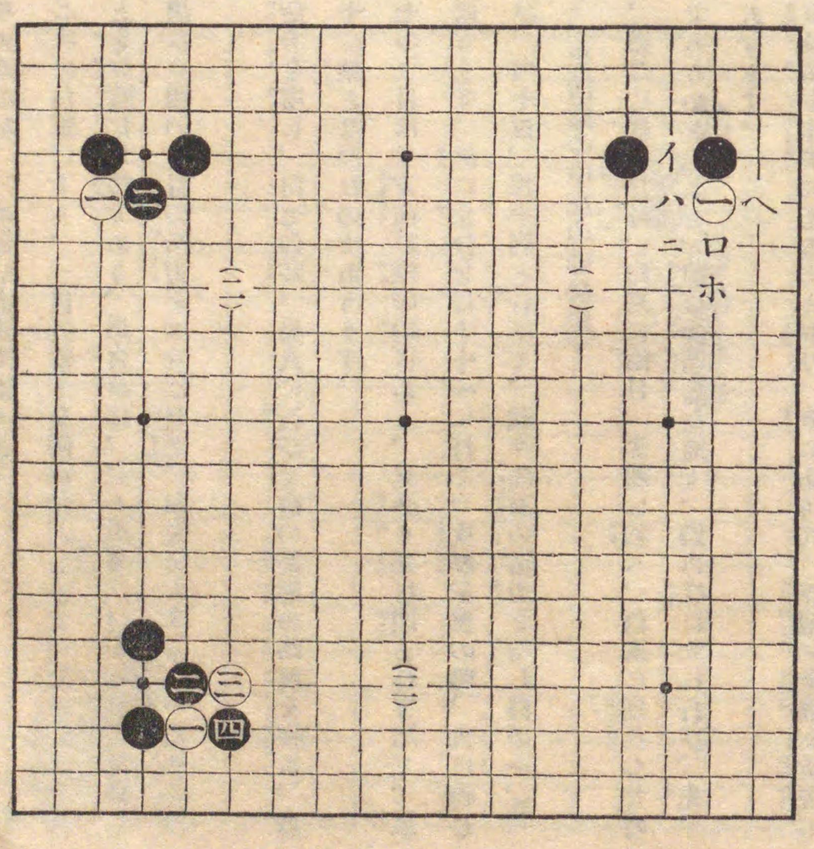
次に黑ロに打つ手は、如何かと云ふと、之は形が飛となつて居るので、白一の附に對する應手としては、惡手であります。即其變化は、此時白ハに行ひ、黑イに粘げば、白ニ、黑ホ、白への下りとなつて、黑は石を左右に隔てられる形となります。

即前の黑イは堅過ぎる手、ロは連絡の無い手で、此二手は、共に白一に對しての、適當の應答とは云へませぬ。

然らば黑は如何打つのが宜いかと云ひますと、此形黑優勢を利用して、

(二)、强く尖の形で二と綽ねる手を最善とします。斯く打てば、白を下に約へて其活力を少くする事が出來、黑は掛粘の形で互に連絡を取つて居ります。

(三)、次に手三と綽れば、黑は四に切つて、白一を當り



基礎篇第三十六圖

としたので、此形では、斯く強く攻めるのが、一番善い方法であります。

第三十七圖（一）　（前圖の續き）次に白五に下り、一目の當りを防いだとします、此時黑は、其形を見るに、既に白三と、一、五とを分離した後であり、黑自身は、二と黑●二目とは互に連絡して居りますから、此形となつては黑は只四の一目の活力を增せば自然、白を死とする事が出來るのであります。

故に黑は六と、行の形で此石の活力を增し、白七の時、黑八に行びて白の發展の餘地を狹め、且つ自ら守り、次に白九に當り、黑十に粘となつたのであります。

白十一の時には、白の一、五、七の三目は、方向が邊の端にあり、又全く黑に圍まれて居て、最早發展する餘地の無い石となつて居ります。故に止むを得ず十一に打て、攻擊を黑の四、六に轉じたのでありますが、黑は十二と行び、白十三、黑十四と行びて、益々此石の活力を增し白の一、五、七の三目を死としたのであります。（死活篇の中死の部參照）

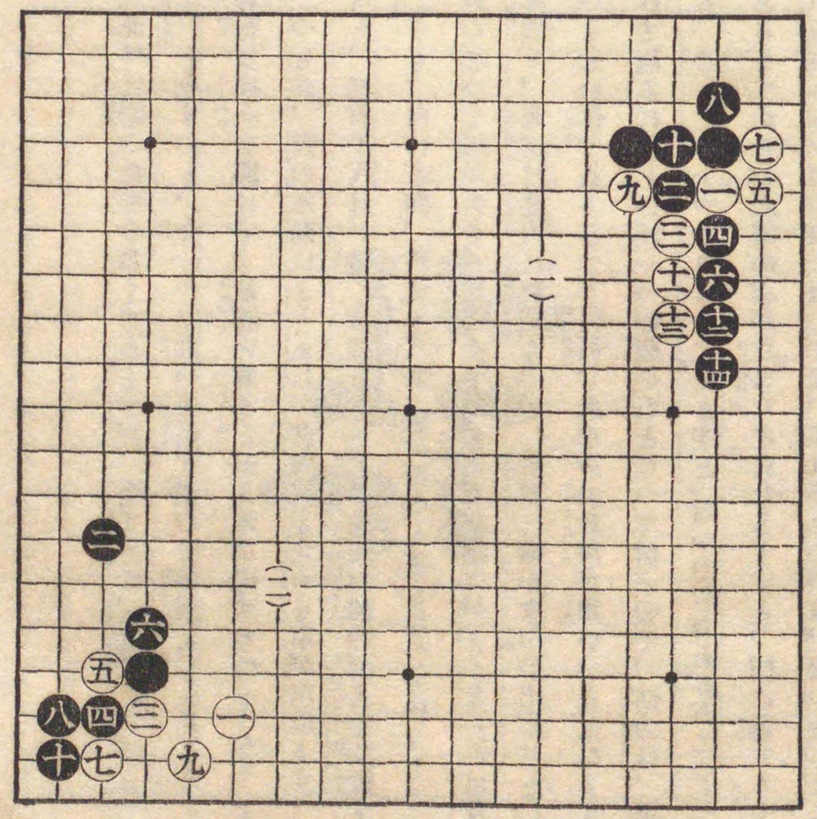
（二）、白一と黑の置石にカヽリ、黑二に應けた時、白三に附け、黑四に約へ、白五に切違つた時次に黑は如何打つのが一番宜い手であるかと云ふと、前に說明した通り、圖の樣に六に行び、先づ一方を堅くするのが一番良い手であります。

で此形は、前の三十三圖の樣に其位置が中央にあるのと異ひ、隅にありて、活動の範圍が非常に

狹くなつて居りますから、結果は、白の何れかの一石を死とする事が出來るのであります。

此時に白七に當りとすれば黑八に逃げ、白九に掛粘げば黑十の約へとなりて、白五の一目と、黑四、八、十の攻合となり、黑勝となるのであります。

猶外に色々な變化もありますが、先づ圖の樣に打つのが黑は一番正しい打方で、此形は又置碁の定石となつて居ります。



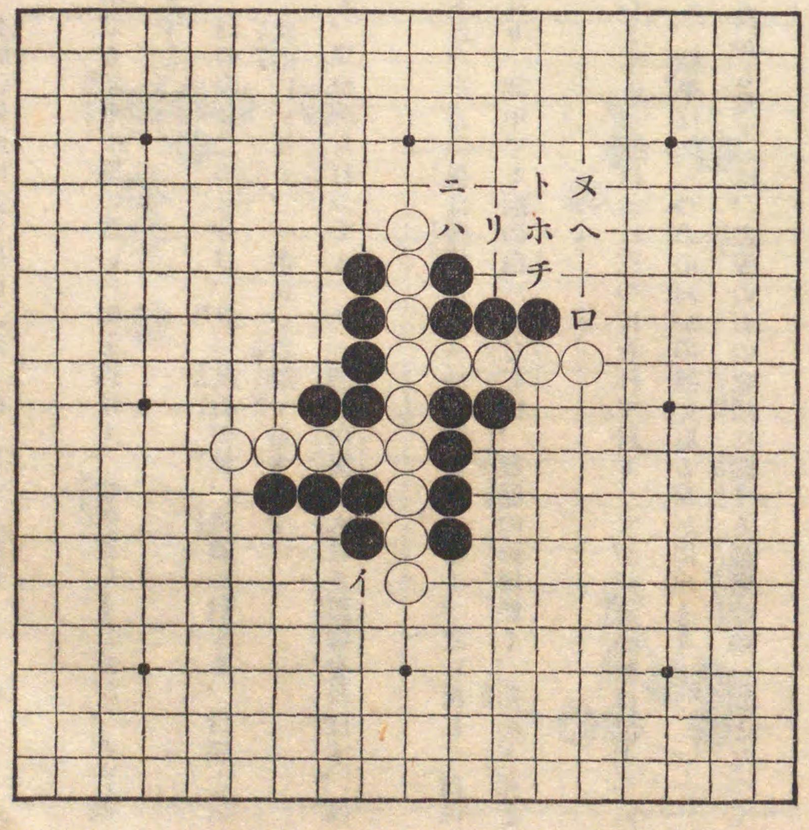
基礎篇第三十七圖

切

以上は僅かに一例を擧げたので、此外に變つた形も多くありますが、要するに、接戰となつて後、次の一着手は、「石を連絡して其活力を增すのと、今一つは敵の連絡を絕つて其活力を少くする」此二つの意味が含まれて居れば、如何な場合を問はず、最善の着手と云ふ事が出來るのであります。次は切と凝の形について、此二つも亦、前の通則によりまして其善惡を定める事が出來ます。

第三十八圖　假りに白石十七目と、黑石十八目と接して居るとして、扨此白黑の勢力を比較するに、石の數は黑が一目多く又活力も、白は十四、黑は十八で、黑が四つも多くなつて居ります。石の數も、又活力も共に黑が多くなつて居るから、只其丈で見ると、無論黑がよくなければならぬ筈でありますが、實際は全く反對で、此形は黑大に惡しく、若し實戰に斯んな形が出來たとしたら、之丈で其一局は黑大敗と云つて宜い位であります。何故、此形が夫程黑が惡いかと云ひますと、此形、黑は石を四つに隔てられて居るに對し白は一つの强い石となつて居るので、活力は、黑は合して十八を持て居ると云つても、若し之を一つ々々にして見ますと、四つの活力ある石二つと、五つの活力ある石二つとの集りでありますから、之等の石が攻合なぞになりますと、四に對する十四又五に對する十四で、皆此十四の活力ある一つの白に對しては、離れ離れの石は、幾つ接しよふとも、結局打投かれてしまふのであります。其例として以下、變化を揭げて見ますと、此時黑先イに打つとして、次に白ロに曲れば、黑は既に四目危い形でありますから、黑ハに逃げ、白ニ、黑ホ、白ヘ、黑ト、白チ、黑リ、白ヌとなるので、斯ふ云ふ形となつては、益々白は勢力を展ぶるに反し、黑はヤット此石を逃げる位で、到底勢を張る餘裕なぞは無いのであります。

で他の三方の黑も、先づ同じ様な譯で、白に先手で攻め



基礎篇第三十八圖

られますと、只逃げるに吸々とし、其間に好所は盡く白に占領されてしまふ結果となるのであります。

第三十九圖　前圖は切の形の中でも非常に黒の惡い一例を掲げて、説明致しましたが、今實戰に出來る形で、切と粘との形を見ますと。

（一）、此形で黒先一と切る手は、白の力を二つに分け、且つ其石の數、黒四に對する、白三と云ふ優勢を利用し、白を攻めたので、此形に於ける、一番良い着點であります。

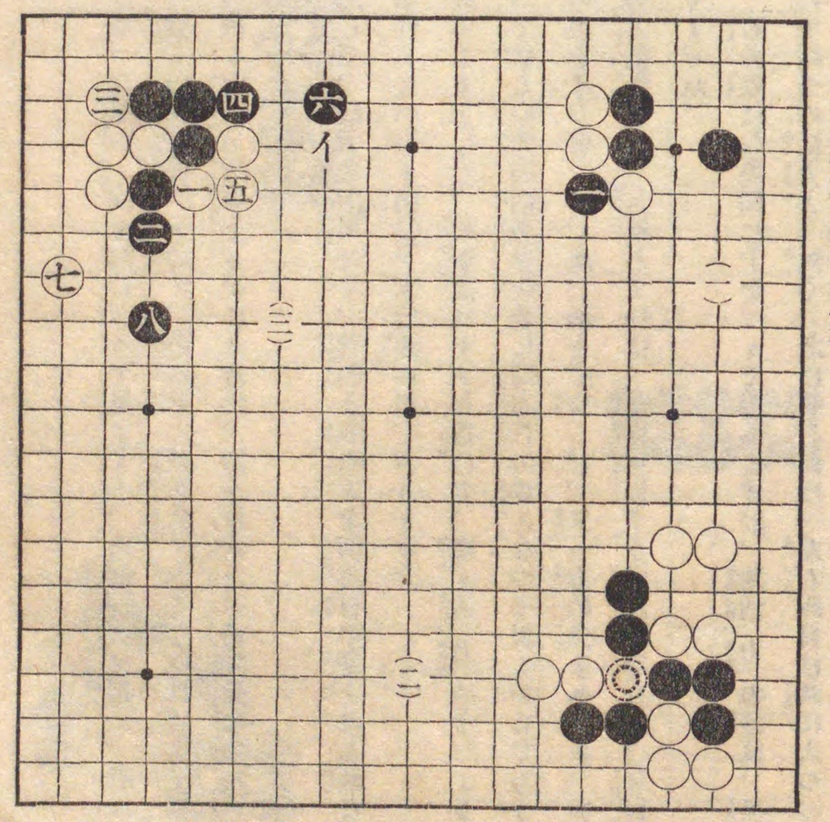
（二）、◎の一點は、白から打ても、又黒から打つても、此一隅の白黒に大なる影響を及ぼす、唯一の要點となります。

で若し此點を黒から粘ぐとしますと、三方の黒は接續して一つの強い石となり、之に反して白は石を三つに隔てられ、皆弱い石となり、其中でも隅の白三目なぞは、發展の餘地無く、殆んど死となつてしまふのであります。

處が反對に白から此點を切るとしますと、石は共に三つに分れて居りますが、石の數は黒七つに對する白十で、白の方が遙かに強く、結果は此三つの中何かの黒を取る事が出來ます。

斯樣に◎の粘（黒から見て）又切　白から見て）は、之等の石の死活に關する最緊要の一點となつて居るのであります。

（三）、此形は、互先定石の中の、大斜掛の變化であります。（定石の部參照）で此變化の中、初めに、白一と切る手が肝要で、斯ふ切を打て後、以下黒八までの形は、石は互に二方に分れ、互角の形勢で、中原に發展するのであります、若し初めに白一と切る手を二に打ちますと、黒一の粘となり、白次に四に打てば黒五、白イ、黒三となるので、此形は、黒一石に對する、白二石で斯くなつては以下の戰は白大に不利となるのは云ふまもせぬ。



基礎篇第三十九圖

凝

前の切れ〴〵と反對で、凝り形となつた惡い一例を圖によりて見ますと。前に述べた樣に、石は互に連絡を取り、一石となつて敵に當るのは肝要であつて、戰は常に此方法で進まなければなりませぬが、然し其連絡を取る石は、出來る丈石の活力をムダにせぬ樣、個々皆活力を最有効に用ゐて連絡を保つて居なければなりませぬ。

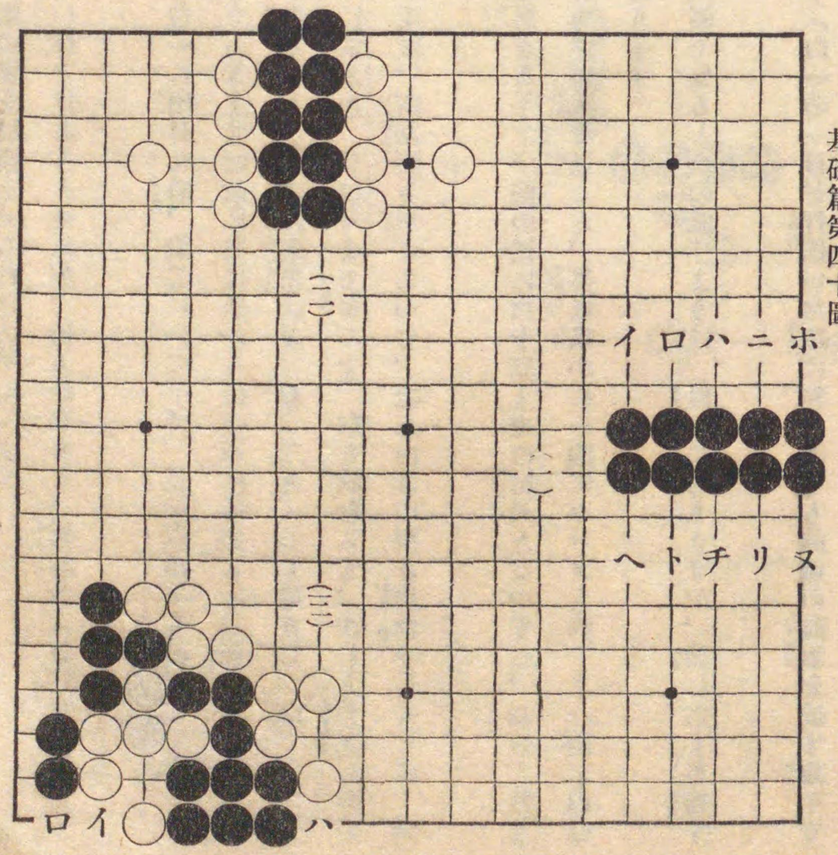
處が只石を連絡するばかりに注意して、活力を活用せず、我石と我石とを同志打の姿となる樣な形とするのを、凝形と云ひ、之も切れ〴〵の石と同樣、大層惡い形であります。

第四十圖(一)　之は極端な一例でありまして、此形黑は十手を費して、漸く活力は十二よりありませぬ。之は黑と黑と重り合つて居る中間の活力を徒費し同志打の姿となつて居るからであります。で此形としては、一方五目の黑をイ、ロ、ハ、ニ、ホまで廣くし、又一方の黑をヘ、ト、チリ、ヌまで廣くして、其中間を我勢力範圍とし、又地とすれば、左程重複する形とはならず、又石の活力も大して無効となつては居りませぬ。

猶此形を(二)について見ますと、石の數は白黑同じ十をづゝでありますが、其活力の差は、黑の方は只、上に二つ下に二つ、合して四つの活力より無く、之に對し白は、左右四目は共に六つづゝの活力を持ち、猶其上に、左右に一目の援兵を持ち、大に勢を張つて居ります。

で圖の樣に重複する形は、實戰では殆んど出來ぬと云つて宜い位でありますが、然し重複する形の惡い理は同じでありまして、若し一局面の中一着でも斯樣に重複する手を打つたとすれば、つまり夫れ丈け、形勢を損ふ譯となります。

(二)は、互先の碁で稀に見る形であります、此形は、黑は初めに白の策戰に隨つた爲



基礎篇第四十圖

に、石を凝形とせられ、遂に此一團の黑を捕虜とせられたのであります。

第四十一圖　之は前圖程、惡い例ではありませぬが、何ふかすると、初心の人の實戰に見る形であります。

（一）、三十六圖と同形で、初め白一に附けた時、黑二に粘ぐ手は、三十六圖でも說明した通り、活力を活用せしめざる所謂凝形であります。故に白は斯かる堅い石に近寄らず、輕く三とハズシて打ち、次に黑四も所謂重複する形であります、此形黑は●、イ、二と三つも連立し、堅くなつて居りますから、此形では少くもイに飛ぶか、又はロまで進んで、白を攻むるも、少しも差支へ無い形であります。處を斯く四と打つ手は、所謂凝り形であつて、之と白五の引と交換せしめては、明かに黑不利であります。

次に黑六、八、十二も、共に堅過ぎる手で、圖の樣に白十三までの結果となつては、初め二目も先きに黑があつた此一隅が、十二までの形で見ると、黑は僅かに一隅にセバメられ、之に對し白は外に形勢を張る形となつたのであります。

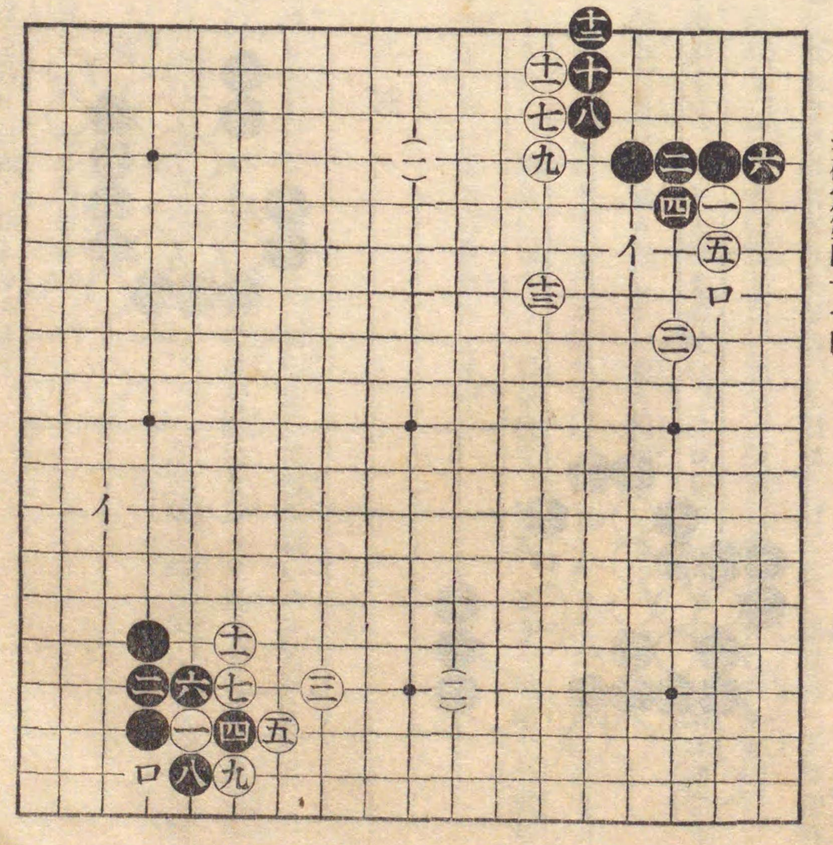
（二）黑四の手は、前圖の四（圖で見ると六の處）よりは、優つて居りますが、然し之も重複する手と云はねばなりませぬ。

次に白九と當りとした時、黑十（白一の一目を打拔いた跡に粘ぐ手）も前述の凝形を成す惡手で

あります。

此粘は、寧ろ四の一目を捨てゝ、十一に綽ね、白一一目を提つた時、黑は手を拔いてイに拓き、白四の處に一目粘、黑ロに粘と打つ方が、大に石の活力を有効に働かした譯で、圖の白十一までの形と比較して、黑優つて居るのは云ふまでもありませぬ。

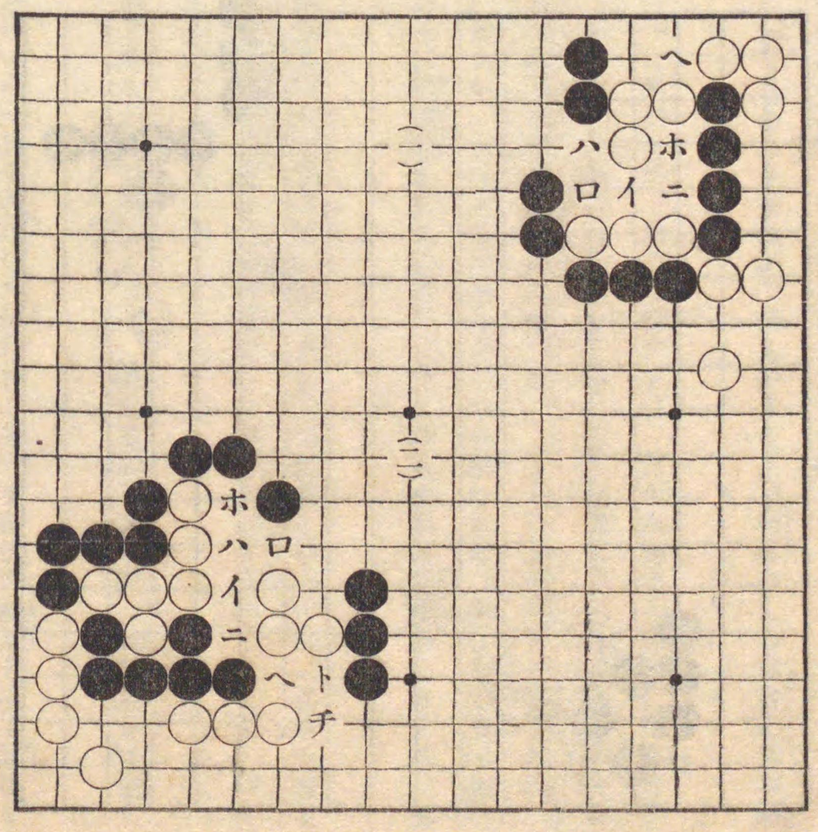
で此說明は、前の四つ目殺しと異ひ、實戰での其局面の優劣を爭ふ手段でありますから、一目の死活を爭ふ場合と異ひ、石の活力を最有効に働



かせるを主としなければならぬのであります。

第四十二圖　敵を重複する形とするには、前に述べた様に、先づ我石を犧牲とし、此犧牲子によつて敵を礙形とし、駄目づまりとするので、斯かる形とすれば、形により之等の石を捕虜とする事も出來ます。詳細は、後の死活篇の中、押つぶし、追落しの中で説明するとして、茲に其一例を掲げて見ますと。

（一）　此形で、黒はイにワリコム手が善い手であります



基礎篇第四十二圖

白は三目を逃げるには、ロ或はニに打たなければなりませぬ、で白ロに打てば、黒は此一子を犧牲として、ハに當りとし、白ニに一目取り、黒猶ホに當りとします、白若しイの處に五目を粘げば、黒ヘに切つて全部の白を取る事が出來ます。又初め黒イの時に、白ロをニに打つも、結果は同じで此時は黒はホの方から當りとし、白ロ、黒ハに當りとして、前と同形とします。

此形も（一）と先づ同一方法で、黒イと綽込みます、白ロに打てば、黒ハと打て六目の白は死でありますから、白ロの手でハに當りとすると、黒ロに切つて一目を捨て、白ニに提り、黒ホ、白若しイに粘げば、黒ヘ、白ト、黒チと切て、此一團の白を取ります。

切と凝の比較

切と凝、此二つは實戰に多く出來る形で、又二つ共に、碁形として最も惡いのであります。

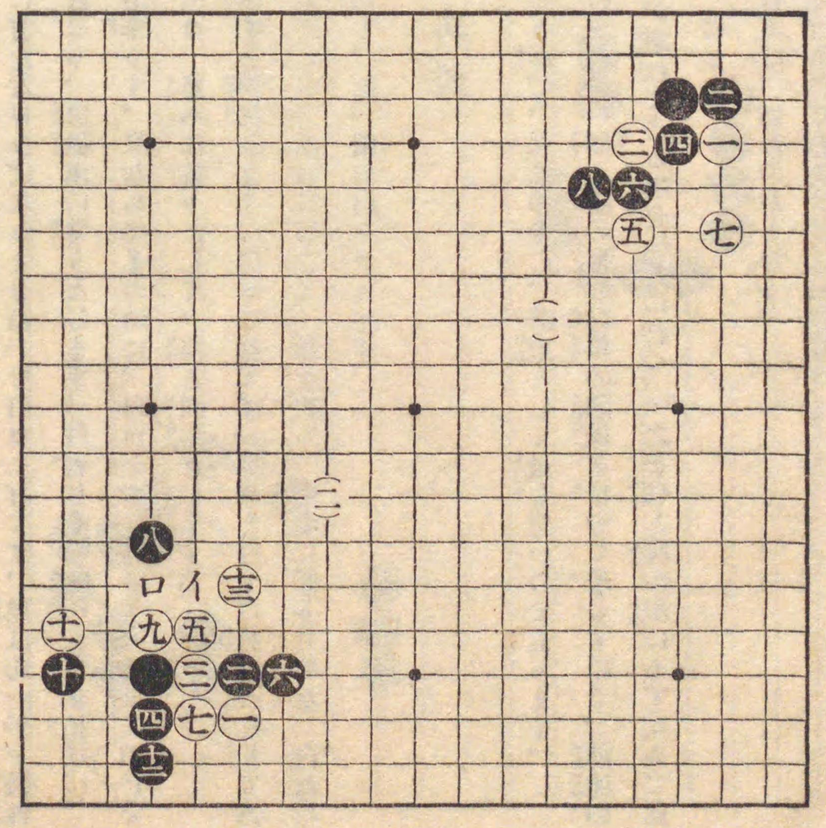
で前に述べました、行、尖、飛の三つは、切と凝の形に密接の關係を持つて居るもので、前述の「石が接した場合は、行或は尖、石が離れてある場合は飛に打つ、」之を切と凝の形にあてはめて見ますと、之を反對の形に打として、若し

一、石が接して居る時に飛を打てば、切れの形となり。

二、離れてある時に、行或は尖を打てば凝の形となります。

第四十三圖（一）　其實例を擧げて見ますと白一、黑二と石が接した場合、白は離して三と飛を打つとします、此飛は大惡手で、次に黑四に突出し、猶次に白五に飛べば、黑六、白七に飛べば、黑八と眞直に行出します。

斯ふなつて其形を見ると、白は行或は尖で應けなければならぬ處を飛で應けた爲に、三の白は切離されて無効の石となり、且つ白一、七、五も連絡の充分で無い、弱い石となつて居る、之に對して、黑



基礎篇第四十三圖

は一つの強い石である。其上に隅、邊に大に勢力を張る事となります。

石を切れ々とさるゝ原因は以上の通りでありますが、猶外に、一つの原因、夫れは、これも前に述べました、石の連絡と活力の活用とで若し「石の連絡を計らず、連絡の無い石を個々に動く場合」には、同じく切れ〴〵の形とさるゝのであります。

（二）の樣に、白一、黑二、白三に綽込んだ時に、黑は兎に角五に約へ、白七、黑四と打て、不完全ながら此四つの黑の連絡を計り、此石が共同して白を攻めなければならぬのを、圖の樣に黑四、次に黑六と、石の連絡を計らず別々に動いた爲に、白七までの結果、完全に石を兩斷されてしまつたのであります。

次に黑八に至つては、止むを得ず九に押し、白イ、黑ロと打て極力、左隅を防備し、場合によつては、黑二、六の二目は、棄てゝしまふ、手を選ぶのが宜いのであります。

處を又圖の樣に、連絡の無い八の一着を下した爲に、白に九と曲られ、黑十、白十一、黑十二と隅を守つた時、白十三に尖となつて、遂に黑は石を三つにせられ、其中でも黑二、六と八との二つは根據も無く、大層弱い石となつたのであります。

第四十四圖　次に石を凝り形とせられる原因は、白、黑石が離れてある時に、行或は尖を打ちし爲。

其例を擧げて見ますと、(一)、黑一と白二とは一路離れて居ります、故に黑の次の手は、五の飛で應ずるのが、善い形であるべきを、斯く三と行びたので、之は如何なる場合を問はず、所謂凝形となる惡手であります。次に白は定法に從ひ四に飛黑猶五に行、白六に飛、次に黑七に飛を打ちましたが、既に遲く、此處では黑三子も連立して居る關係上、黑は八の邊まで飛ばなければならぬ處であります。以下白八、黑九に附、白十、黑十一、白十二、黑十三に粘、白十四に粘、黑十五、白十六となつた、形を見ると、石は白黑同數、八子づゝを費して居りますが、其勢力を比較すると、白二、四、六は隅に根據を持ち、且つ白八以下十六まで大に外勢を得て居る、形に對し、黑は僅かに、一、七の間に、重複した、勢を持つて居ると云ふに過ぎぬのであります。

猶石の凝形となる今一つの理由は、前述切と反對に、互に接して居る時、我石を無意味に堅くばかりして、力の活用を計らぬ場合。

で之を(二)の形について見ますと、先づ初めの白一から黑六までは、普通の應答で、之迄は形として、双方共決して惡くはありませぬが、次に黑八、黑十及び、黑十二は、徒に白の勢を壯ならしめ、味方に取つては、何の効力も無い、所謂凝り形となる惡手であります。

扨以上の説明によりて、次に下す着手の要領を、總括し繰返して申し上げますと、先づ「形」では、

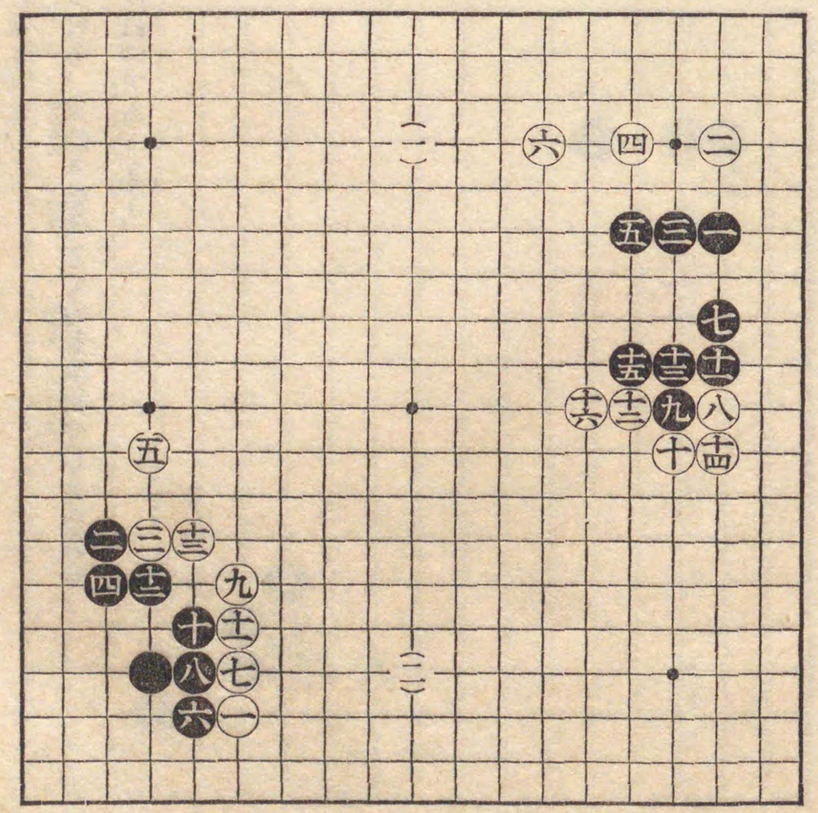
行は行、尖は尖、飛は飛で應ずる。

を普通とし、次に「着意」から云ひますと、

味方の石は連絡を計つて活力を活用し、敵の石は連絡を絶つて其力を隔てる。

之れが一番善い手となります。次に切と凝については、即ち前の用ゐ方を誤つた結果でありまして、若し、

石が接して居る時に飛を打ち、又石の連絡を計らぬ場合。



基礎篇第四十四圖

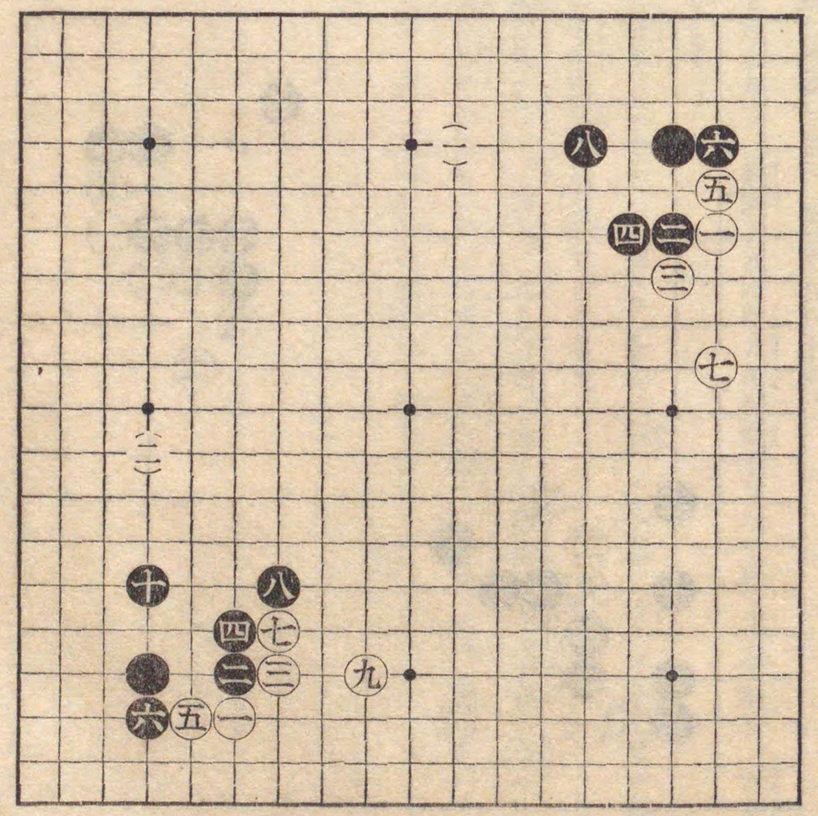
は石は切れ〳〵となりて、弱い石となり、又、石が離れてある時に、行、尖を打ち、又餘り堅過ぎて力を活用せしめぬ場合。石は凝形となり、形勢は甚だ振はぬのであります。

正しい形

第四十五圖　で次に正しい形、即切は双方共互に切となり、又凝形をなさず、適當に連絡し、活力を有効に用ゐたる完全な形を一、二圖示する事と致します。

（一）、（二）、共に置碁定石でありまして、形としては申分はありませぬ。

先づ（一）で見ますと、黑二に接して打つた爲に、白三の綽を以て應じ、黑四に行、白五、黑六共に行の形で應じ、



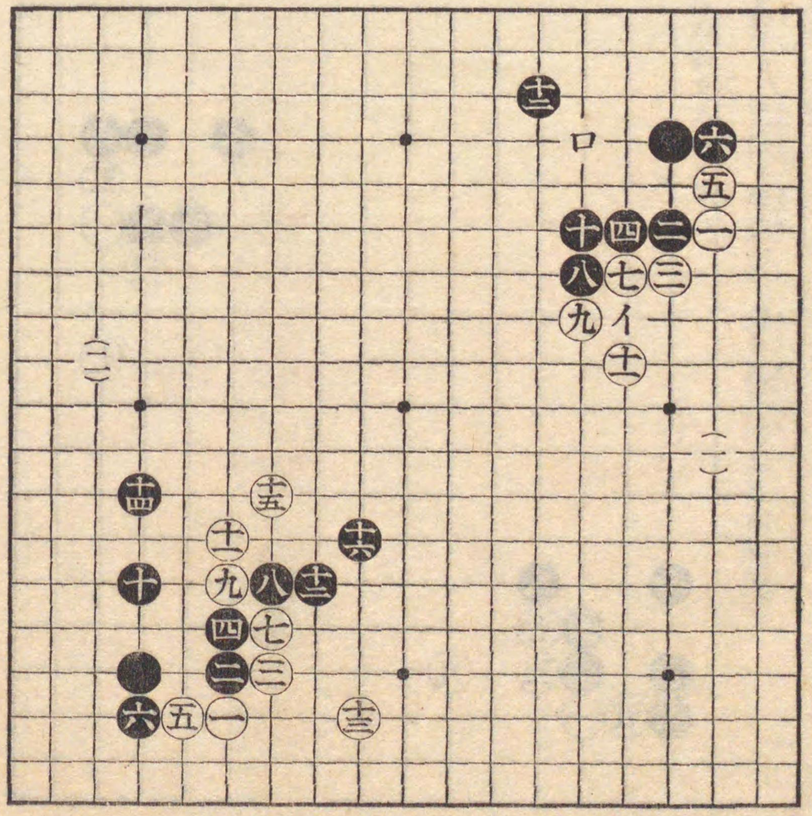
基礎篇第四十五圖

次に白七に斜走せし時、黒も八と一間に飛び、其形を整へたのであります。

（二）、黒六までは前と同じであります、次に白七に押した時、黒八と強く綽ね白九に守り、黒も十の守りとなつたのであります。

第四十六圖（二）　之も前の變化で、黒八までは前と同じ形であります。

扨闘の様に白九に綽ねた時は、黒十に堅く粘ぐ手が好いので、此手は次にイに切る手を狙つて居ります。故に白も



基礎篇第四十六圖

十一と掛粘ぎ、黒十二に打て此方面に根據を作つたのであります。

で此十二の手は、此形では黒に十とありて、前圖よりは此方面が堅くなつて居りますから、此關係でロに一間に守るより優つて居ります。

（二）、白九に切つた時は、黒十に守り、白十一、黒同じく十二に行、白十三に守つた時、黒十四に飛、白十五、黒十六に尖み、共に中央に行出した形であります。

で圖の様に十六に尖んだまでの形を見ますと、黒四、八と白七、九との切違により、石は互に二つに分れ、中央に行出して居り互角の勢でありますが、只黒は先着の効力により、六、●、十、十四と左隅邊に根據を作つて居りますから此一隅の形勢は黒優つて居ります。

死活篇（其三）

死活について

石に死活の別があります、死活は實戰の根本で、色々な變化も皆死活をもとゝし起るものであります。

で以下説明致しまする死とは、前の四つ目殺し、又は當りから打拔かれる死、或は攻合負となつて提られる死と異つて、「敵に四方を圍まれて外に逃出す手も無く、又中で自活の方法も無い」所謂形の死（打拔の死で無く）を云ふのであります。

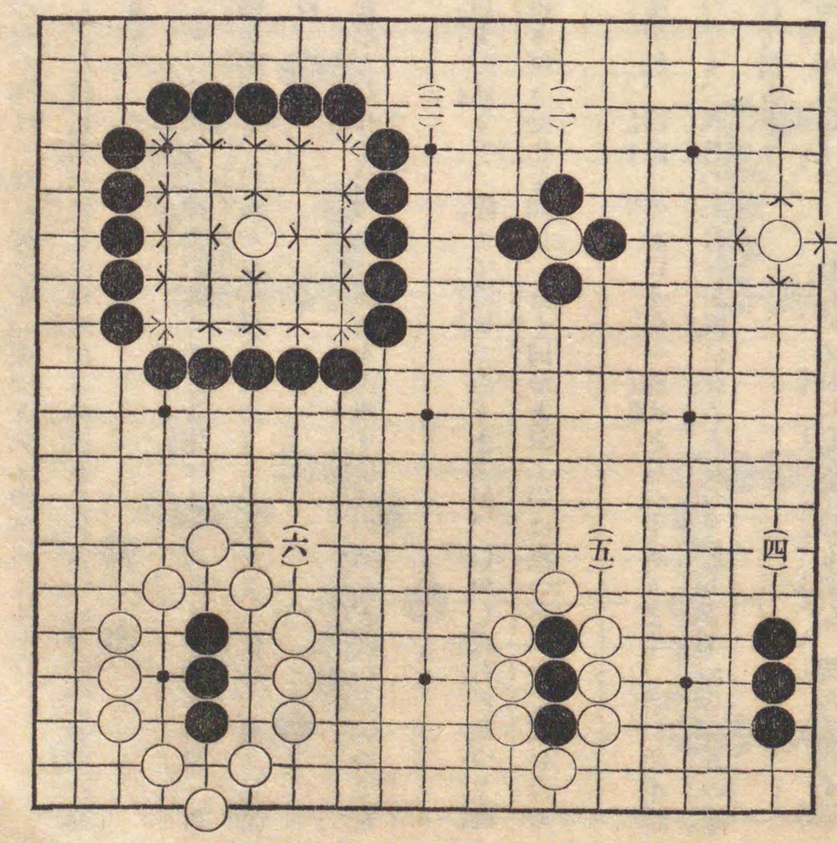
斯かる石は、まだ活力は多少持つて居ても、其石は既に敵の重圍の中にありて、活力を用ゆる所無く、敵からは何時でも活力を奪はれ、打拔かれてしまふ石を云ふのであります。

第十四圖　（一）、白の一目は、前に述べた通り其四方に四つの活力を持つて居りますが、此石が（二）の様に四方を圍まれると、打拔かれるのは前述の通りであります。

處が、（三）の様な形が出來たとして、扨中の白の一目は何ふ云ふ結果となるかと云ひますと、此一目は圖のまゝでは、（一）と同じ様に完全に四つの活力を持つて居ります。處が此石は只四つ力を

持つて居ると云ふ丈で、圖の様に黑に廣く且つ確かに圍まれて居ては、此圍みを破り外に逃出す望も無く、又中で自活の途も無い、何時でも黑に迫られゝば打拔かるゝ石となつて居ります。故に此石は今直ぐに、打拔かれる石と異ひますが、結果に於ては（二）と同じで、結局盤上より取去らるゝ外は無い石であります。

で此理は、一目に限らず石が如何に多數であつても同じ譯で、つまり其石が圍まれ、



死活篇第十四圖

其圍まれた石が、中で自活の方法の無い時は一様に皆之を「死」と云ふのであります。

(四)、黑三目連續する形でも、(五)の様に其活路を直接塞がるれば直ぐ打拔かれ、(六)の様に間接に圍まれゝば、結局死石となります。

然し碁は、互に着手する間には、何んな大きな變化が起らぬとも限りませぬから、(三)の白一目又は(六)の黑三目でも、まだ活路を塞がれ、打拔かれた譯ではありませぬから、何時、何んな變化が起つて逃出さぬとも限りませぬ。

然し實戰で、斯ふ嚴重に圍まれた形となつては、先づ此石を逃出す望は、殆んど無いと云つて宜いのであります。

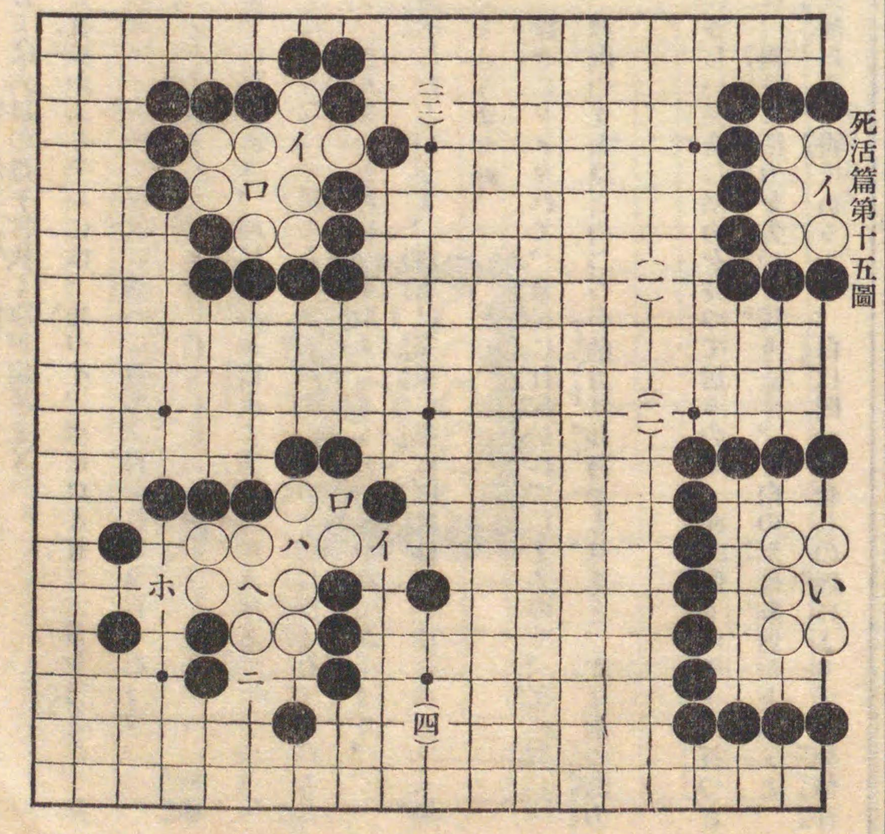
第十五圖　石の死となる理は以上の通りで、極めて簡單でありますが、しかし死石となつて現はるゝ形は、局面の異るに隨ひ、限り無き變化を起し、全く同形と云ふのは無いと云つて宜いのであります。

(一)、白の五目は完全に四方を塞がれ、活路は僅かにイの一點丈となつて居ります、處が此イ點は、普通の活力と異ひ、黑から打つても、其打つ石自身が既に死石となつて居りますから、碁の憲法として此處へは打つ事は禁ぜられて居ります。

處が只一つ、此處へ打つて宜い場合があります、それは圖の様に白の活路を奪ひ、黑から此イ點に投ずると、同時に、打上げらるゝ時であります。で此形でも黑イと打てば白の活力を殘らず塞ぎますから、此石を打拔く事が出來るのであります。

(二)、それと同様に、(二)でも中の白五目は、結局死となるので、此形で黑から、直ぐ「い」點に打つ手は無いが外の駄目がツマれば「い」に打て、打拔く事が出來ます。

(三)、(四)、同じく白死の形であります。(三)では、若し黑からイに打てば、二目を



死活篇第十五圖

打拔き、次に黑の手番の時、ロに打てば六目の黑を打拔く事が出來ます。

同樣に（四）でも、黑から此石を打拔かふとするには、先づイ、次にロと打て二目を當とし、次に黑ハに打拔、猶ニ、ホなどの駄目をツメ終つて最後に黑へに打て六目を打拔き得られます。

で此黑イ以下へまでの手は、只白を打上げるに、斯ふ打てば宜いと云ふ說明をしたまでゞ、實戰では、別に斯ふ打たずとも此儘の形で白死であり、終局此石を取去る事が出來まするので、つまり前に說明致しました通り、石は何んな形となつて居ても、其石が若し四方を敵に圍まれて逃げる路無く、又中で自活の方法の無い時は、死となつて終局之を取去らるゝ外は無いのであります。

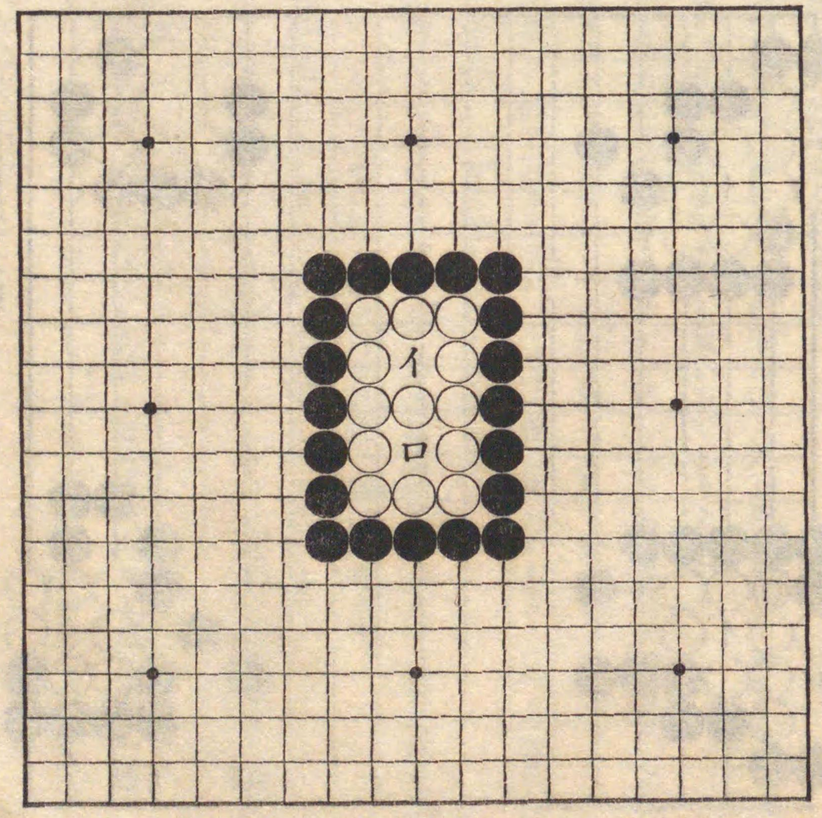
第十六圖　處が圖の樣な形に遭遇したとします、白石は完全に黑に圍はれて、少しのスキも無く、又活力も只イと、ロとの二つよりありません。

前圖では、活力は幾つあつても、徐々にツメラれて、最後に打拔かれてしまふので、之に對し一方は少しの抵抗力もありませぬが、扨圖のイとロとの二つの活力は如何かと見ると、之は前の活力とは少し趣を異にして居ります。

即、イとロ點とは、共に一着手に等しい完全な活力を持つて居るので、此際假りに黑イに打つとすると、黑の斯く打つたイの一手は、同時に活力を失つて居ります。で白の形は如何かと云ふと、まだロに活力を持つて居り、且つ此際白の手番であるから、白は四つ目殺しの理によりて、無條件で此イの一目を取去る事が出來るのであります。

猶次に黑ロと打つも、同じ譯で白はイに活力を持つて居るから、ロの一目を取去ります。

碁の法則として、一時に二着を連け打つ事の許されぬ以上は、斯く完全な一着手の活力に等しいものを二つ或は以上持つて居る石に對しては、如何に嚴しく外を圍んで見ても扨此最後の二つの活力に對しては、如何とも手段の施しよふはないのであります。



死活篇第十六圖

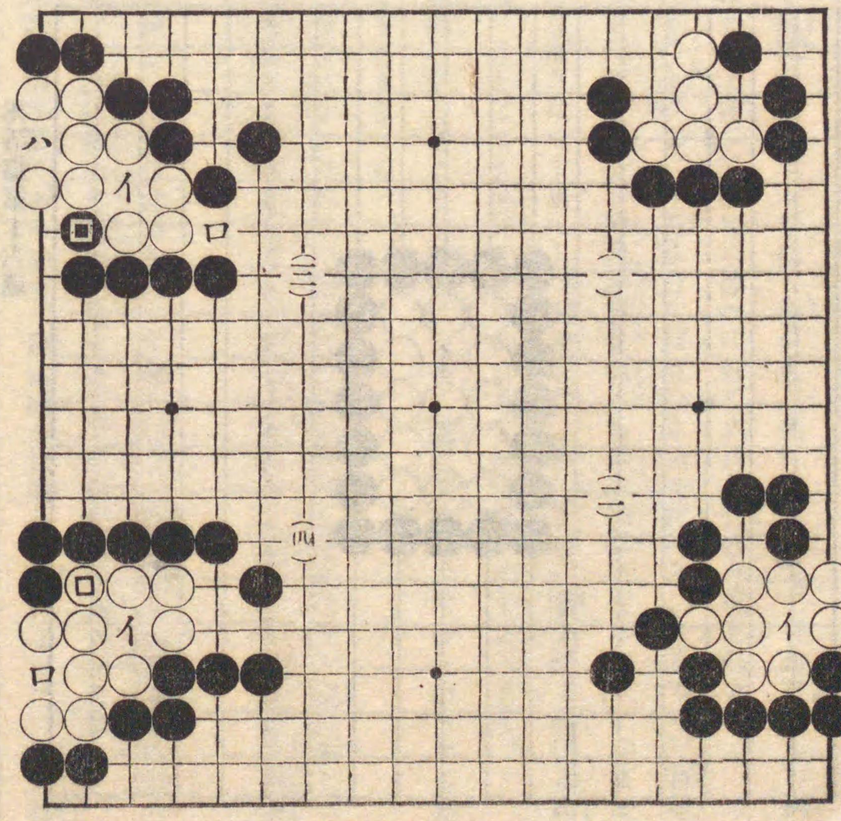
之を「活」と云ひ、一旦活となつた以上は、以後に盤上に何んな大變化が起るとも、絶對に存在する資格のある石であります。

第十七圖　以上の説明によりまして、石の死活を區別して見ますと、左の通りとなります。

四方を敵に圍まれ、又且其圍みを破る方法の無い形の中で、

一、完全無缺な一手に等しい活力の一つも無いもの

又は一つ丈のものは死。



死活篇第十七圖

二、若し二つ或は二つ以上あるものは活となつてをります。

圖により之を區別しますと、(一)の白五目は死の形、即此五目は、只石が連續して居ると云ふ丈で、黑の圍みを破つて逃出す手も無く、又中で自活の方法も無い石であります。

(二)は、**イ**點に完全な一手に等しい活力は持つて居りますが、然し白は此**イ**點只一つ丈で、之れ以外に今一つの同じ活力を求むる餘地はありませぬから、此形も同じく死であります。

次に(三)と(四)、此二つは形は大層よく似て居りますが、(三)は▣に黑石があり、(四)は▣に白石あり、只此黑と白の相違丈で、一方は死、一方は活となつて居ります。

先づ(三)の**イ**點は、今の處直ぐ此處に打つ手は無いが、若し**ロ**の駄目が塞がると、三目の白は當りとなつて來ますから、黑は**ロ**にツメ、次に黑**イ**に打てば三目を打拔く事が出來ます。

扨三目を打拔いたあとは、白は完全な活力としては**ハ**の一點丈となつて居ります。

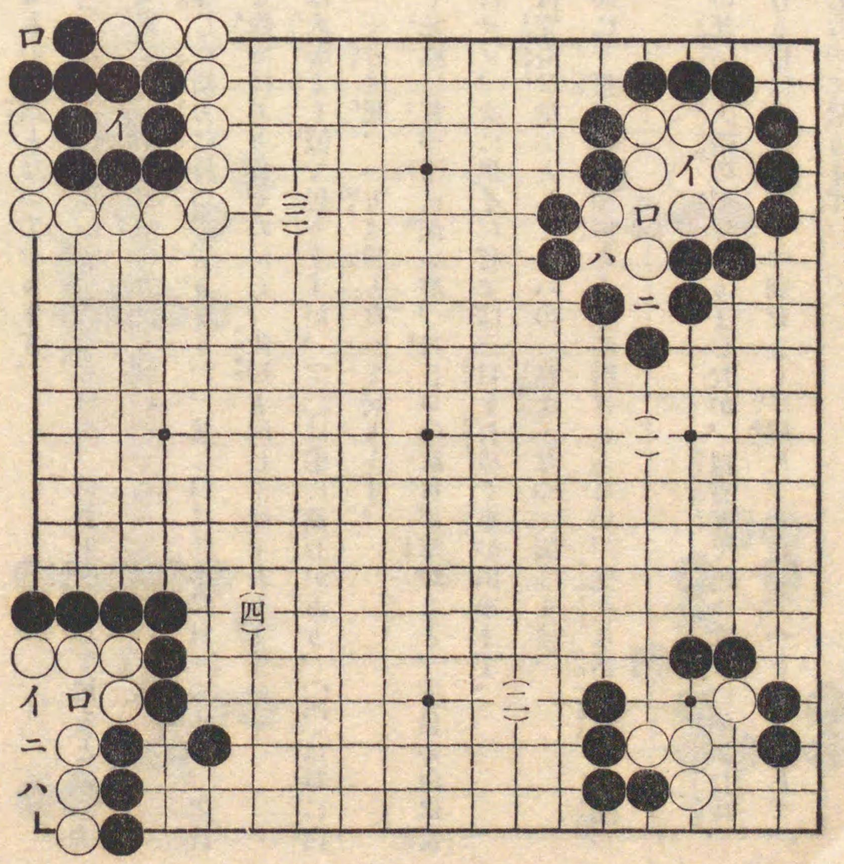
處が(四)の**イ**と**ロ**とは、二つ共に、黑からは如何とも手の附けようない、完全な活力で、隨つて此形は活となつて居ります。

第十八圖　これまでは只石の死活の大體の形でありましたが、扨實戰で色々な形に遇つた時、之が活又之が死であるかを見分けるには、左の六つの別をよく了解し、次に此六つをもとゝして、死活を知るのが、一番宜い方法となつて居ります。

一、眼無し　二、缺眼
三、一眼　四、一眼缺眼
五、二眼
六、二眼となる形

總ての死活は、此六つの形から成立つて居るので、其中（一）、イ點は黑からは如何にするも、侵す方法の無い、（十五圖（一）の様に活力を殘らず塞がれて打拔かれる場合は別）完全な一つの活力となつて居るもの、之を一眼と云ひます。

次にロは、直ぐ黑から此處へ打つ手は無いが、若しハ、



死活篇第十八圖

ニの駄目が塞がると、白の二目は當りとなり、黑からロに打たれて二目を打拔かれます、之はイの様に完全無缺でなく、此一部分丈の駄目が塞がれると當りとなりますから、之を缺眼と云ひます。

（二）の様に黑に四方を圍まれ、其上にまだ一眼も眼の組織の無いものを、眼無し死の形と云ひます。

次に（一）圖イは、完全な一眼、ロは缺眼であり、且つ黑に包圍されて居る形を一眼缺眼の死と云ひます。

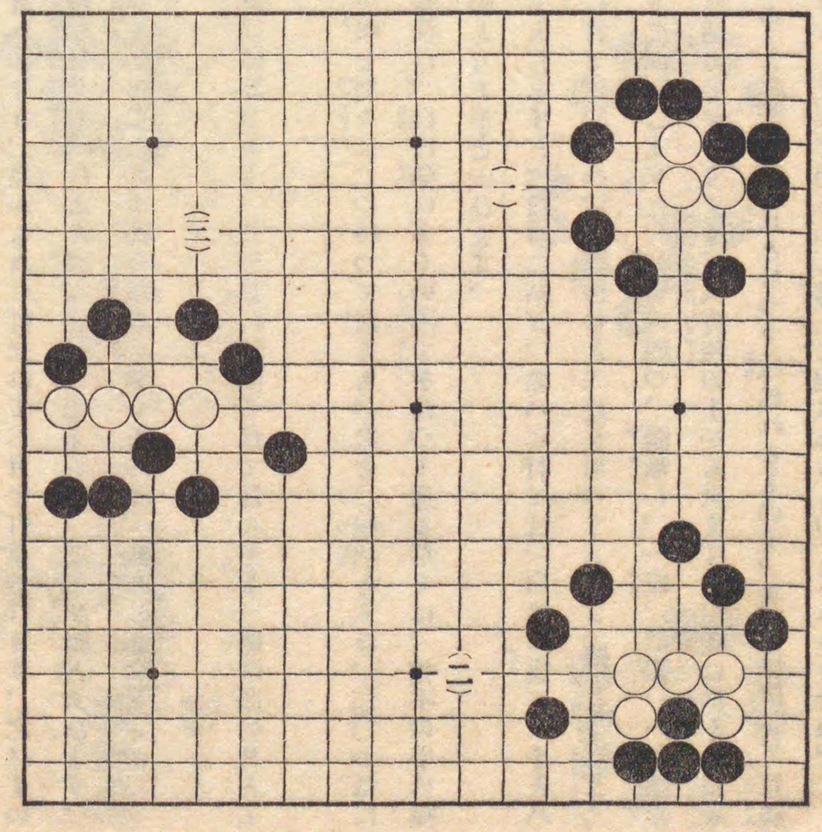
（三）のイとロとの様に、完全な一眼を別々に二つ持つて居るもの之を二眼活と云ひ、（四）の様に見た處別々に二眼は無いが、然し斯様に、白は隅に多くの活力を持つて居る形では、相手の手に隨つて結局二眼となるので、之を二眼となる形と云ひます。

で（四）の變化は、此時黑イに當りとしますと、白ロに粘ぎ、黑ハに打てば、白ニに提て、イとハに別々に二眼を持ち。又黑イをニに打てば、白ハ、黑イ、白ロと二目を取つて、白は二眼となります。

で以上の六つを、石の死活によりて區別しますと、初めの四つ、眼無し、一眼、缺眼、一眼缺眼は死の部、二眼と二眼となる形とは活の部であります。又實戰の上から見ますと、死は多く一眼缺眼の形となつて盤上に出來、活は多く二眼となる形となつて現はれるもので、死活は決して單純な、一眼とか、又は二眼とかはつきりした形で初めから盤上に現はれるものではありませぬ。

死之部

第十九圖　死石の研究の中で、先づ一眼も無い形について、圖で見ますと、(一)、(二)、(三)共に白石は皆黑に圍まれ、中では眼の組織を成す餘地は一つも無く、又外に逃出す手も無く、死石となつて居ります。で斯かる眼無し死の形は、二十五目或は二十目置碁に多く出來る形で、斯かる多數の置碁では若し、黑が巧みに白を包圍する樣に打てば多く眼無し死として白を



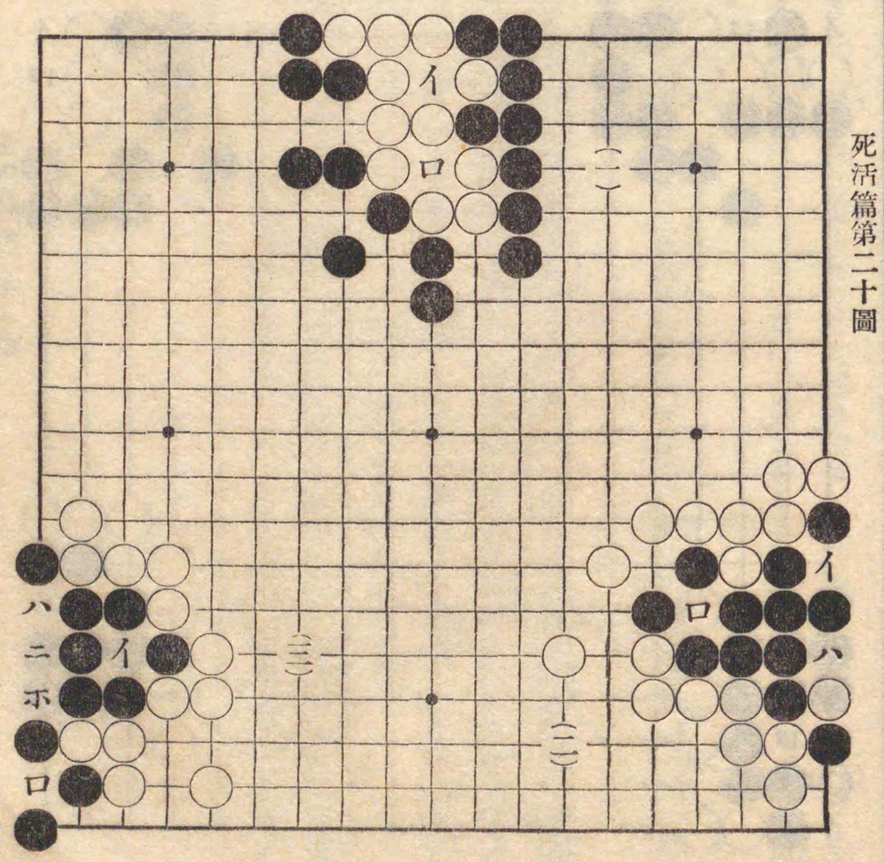
死活篇第十九圖

捕とする事が出來ます。

第二十圖　之は缺眼死の形であります、で缺眼の形は其一石の中に幾つあつても、少しも眼の足しにならず、駄目がツメば、順々に打拔かれてしまひます。

(一)イとロとは缺眼となつて居ります。(二)もイとロとは缺眼、猶此時黑の手番としハに打つと、白一目は打拔けますが、然し此石は打拔いても、其打拔いた時所が既に缺眼となつて居ります。

(三)、イとロとは缺眼、又

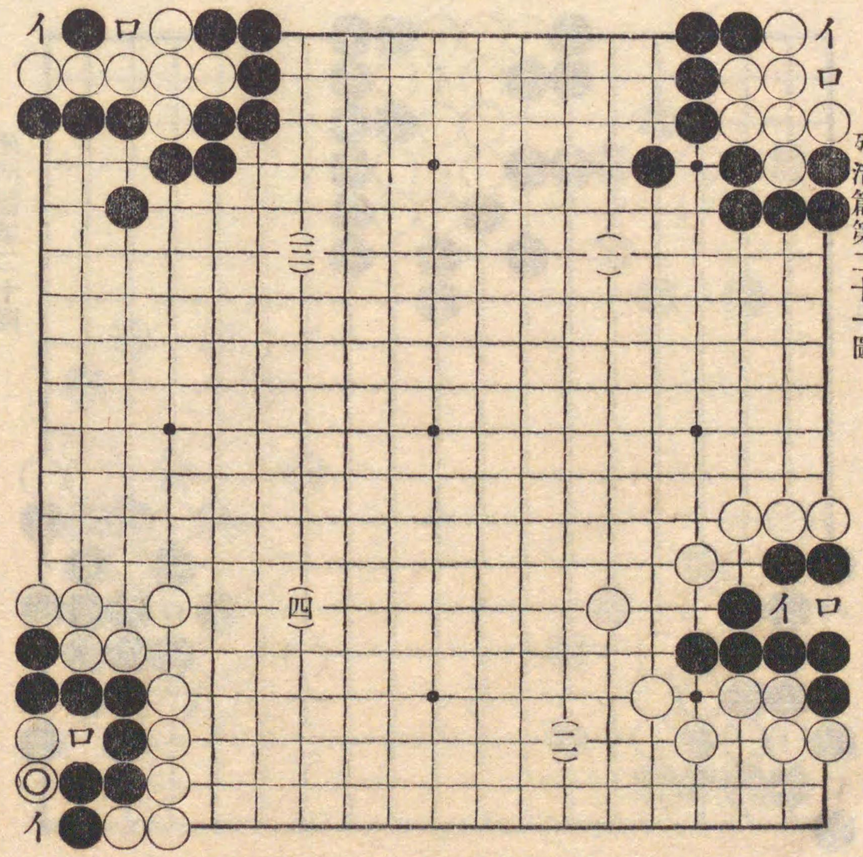


死活篇第二十圖

黑は**ハ**、**ニ**、**ホ**に眼に似た組織は持つて居りますが、斯く盤の最下線にあつては、此處に眼を作る餘地はありませぬ

其變化は、黑**ハ**に打てば、白**ホ**に打込み、黑**ニ**に取るも此**ホ**點は缺眼、又黑**ハ**で、**ホ**に打つも、白**ハ**と打込んで此**ホ**點は缺眼となります。

第二十一圖　(一)、(二)、(三)、(四)共に一眼死の形であります、此中(一)、隅の白は活力は**イ**、**ロ**と二つでありますが、結局之も一眼のものと、同じで死石となります。



死活篇第二十一圖

それは、此形で黑**イ**と打込みますと、白は**ロ**に當りとなつて居るので、次に白**ロ**に一目を打拔くも前圖一眼と同じとなつて、黑に**イ**と打拔かれます。又白**ロ**に一目を取る手を手拔きしても、次に黑に**ロ**と打拔かるゝのであります。

(二)、之も(一)と同じで、黑は**イ**と**ロ**にあり、又駄目もありますが、同じく駄目をツメ、次に白**イ**に打込んで、黑を取る事が出來ます。

(三)も同じく、此白を打拔かふとするには、黑**イ**に當りとします、白**ロ**に二目を打拔けば、黑猶**イ**と打つので丁度(一)と同形となつて死。(四)、之も隅は一眼の形と同じで黑死となつて居ります

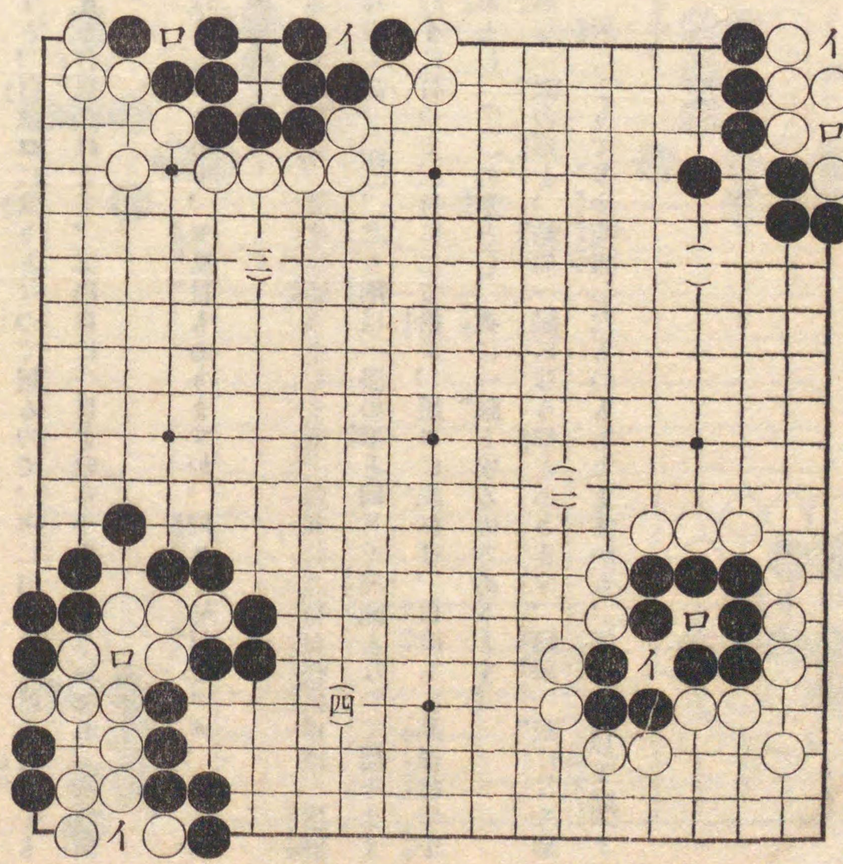
で此黑を打拔かふとするには、白**イ**に打つて三目にして捨て、黑**ロ**に提れば、白直ちに其提跡の中間白◎にナカデし、漸次(三)の形とし、(一)の形とし、次に一眼とするのであります。

斯樣に同じ一眼死でも、只簡單な一眼の形と、結局一眼になる形とあります、結局一眼になる形には、其種類には色々あるので、形によりて多少複雜したものもありますから、詳細は、以下點(ナカデ)の部で再說する事と致します。

第二十二圖　次は一眼缺眼の形、此形は前に述べた通り實戰に一番多く出來、又變化も一番複雜して居ります。

形は千差萬別でありますが、茲に先づ簡單な例を掲げて見ますと、(一)、白は完全な眼の組織としてはイの一點で、ロは缺眼となつて居ります。故に此石を若し黑から打拔かふとするには、先づイに一目提り、次に黑イと打拔きます。

(イ)、此形も(一)と同じで二は缺眼、ロは一眼でありま



死活篇第二十二圖

す。

(三)、黑にイとロと二つ缺眼があります。此缺眼は幾つあつても同じで、他方面に一眼より無い時は何れも死となります。

(四)、之もイとロは缺眼、隅は前圖(四)と同じで、結局一眼となる形であります、故に此圖、又は(三)圖の形は、一見二眼はあるやうに見へますが、若し以上の缺眼一眼の別をよく研究し、此形を見分ければ、容易に了解せらるゝので實戰では又斯かる形が一番多く出來るのであります。

活之部

二眼活について、色々の形は、

第二十三圖(一)　位置は隅にあり、**イ**に一眼、**ロ**に一眼を持つて居ります。

(二)は、下邊の活、(三)は、中央の活の形であります。

で此處に、死活と、隅邊中の位置による、死活の難易の、關係について研究して見ますと、

隅は、前に述べました樣に、其一番端は僅か二着で打拔かるゝので、此隅の端に打つ手は、活力を展べるには、大層不便でありますが、之に反して、先づ根據を占むるには、隅は僅か二着で占領せられ、又死活から見ても、同じく二着で一眼(一)の**ロ**點の如き)を得られる、有利な場所でありますから、實戰では、初めは先づ隅(圖では**ハ**或は**ニ**の邊、に着手するのが、一番宜い手となつて居ります。

之に次いでは邊、邊は三手で打拔かれる代りに、又三手で一眼を得られます。

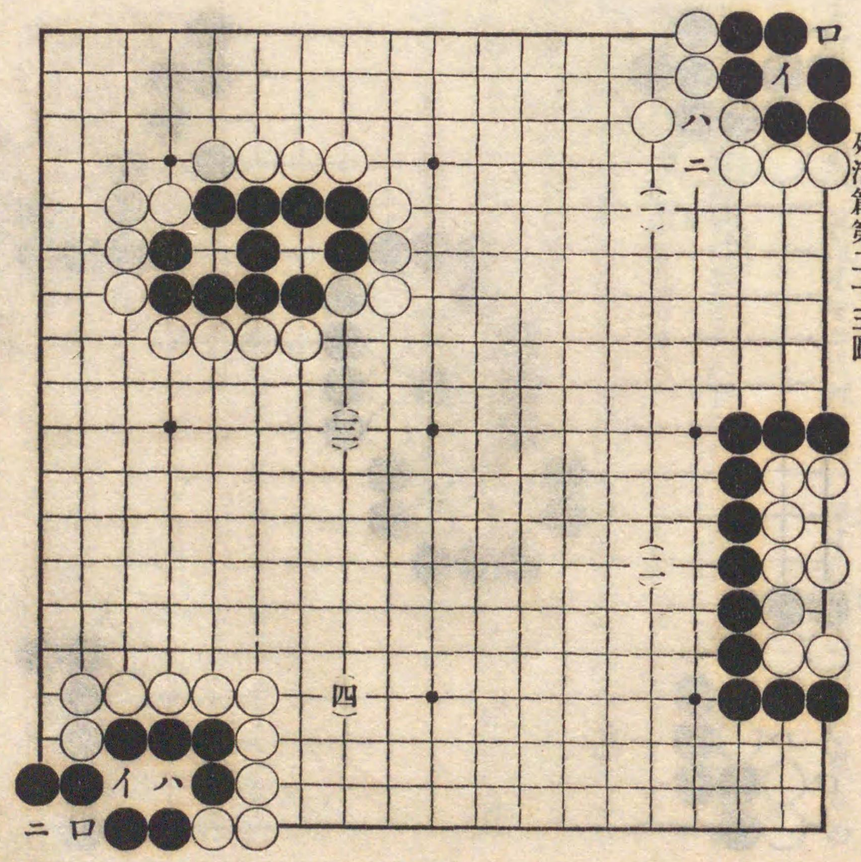
中は形勢を得るには、最好の地點でありますが、其れ丈に中で二眼を作らふとするには、一番困難な場所となつて居ります。

圖について見ても、(一)圖は黑二眼の形を作るに僅か六手で足りて居りますが、邊では同じ二眼

を得るに八手かゝり、中では十一手、即隅の約倍の石を費して漸く二眼を得て居ります

て又隅邊中共に以上の六手、八手、十一手より以下の着手では、何ふしても完全に二眼を作る方法はありませぬ

(四)、形は少し異つて居りますが、黑は**イ**、**ロ**の方面に一眼づゝ、二眼を持つて居ります、で此形で若し白**イ**に打てば、黑**ハ**に一目提り、次に白**ロ**に打てば、黑**ニ**と一目取る迄、之で確かに二眼活の形となります。



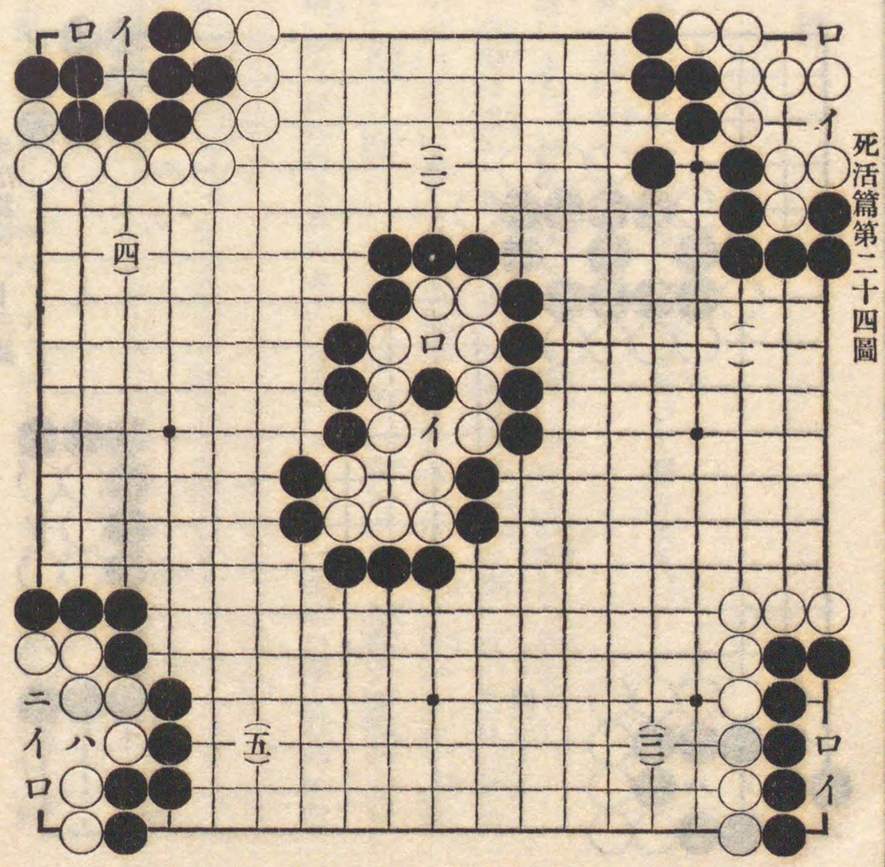
死活篇第二十三圖

第二十四圖　別々に一眼づゝある形では無く、結局二眼となる形について、簡單な形を擧げて見ませう。

先づ(一)について見ますと、之れは別々に一眼づゝあるものと殆んど同じで、白はイとロの二つ、形は二た目でありますが、一眼のものと同じであります。

(二)、此形黑若しイに打てば、白ロに二目提り、黑猶イに打てば、白は其一目を提て二眼となります。

(三)、之を直行四目活の形



と云ひ、此形で白イに來れば黑ロと打つて二眼、又白イをロに打てば、黑イに打て二眼となるので、つまり此儘で活となつて居ります。

(四)、此形を曲り四目と云ひ、之も前の直行四目の形と共に實戰によく出來る形で、之も白イ打てば黑ロ、又白イをロに打てば、黑イと打つて二眼となります。

(五)、白の隅の廣さは五目であります、で隅邊中何れでも、斯樣に五目或は夫れ以上の廣さとなりますと、其組織に缺點の無い限り多く活となつて居ります。

圖について見ますと、此時黑イに打てば、白ロ、黑ハ、白ニに打拔いて二眼となり。又若し黑イをロに打てば、白はイの要所に打つて三眼となるので、之は無論活の形であります。

地取篇（其一）

地について

碁の勝負は前にも述べました通り、つまり地の多少によつて決するもので、之は云ふまでもありませぬが、又其上に前の死活の研究も、又以下説明致します、布石定石の研究も、つまり地の大小をもとゝして初めて價値のあるものであります。

處が若し、地の大小を無視して着手するとしたならば、如何に死活を爭ひ、又如何に布石、定石を巧みにナラべても、之は畢竟意義の無いものとなるのであります。

扨地と云ふのは、如何云ふ形で、如何打てば巧みに圍へるかと云ひますと、詳細は以下説明するとして、先づ地の形とは何んなものであるかを研究しますと、

完全に四方を圍んで敵に侵される餘地無く、又圍んである中で、敵に活路の無い場所。

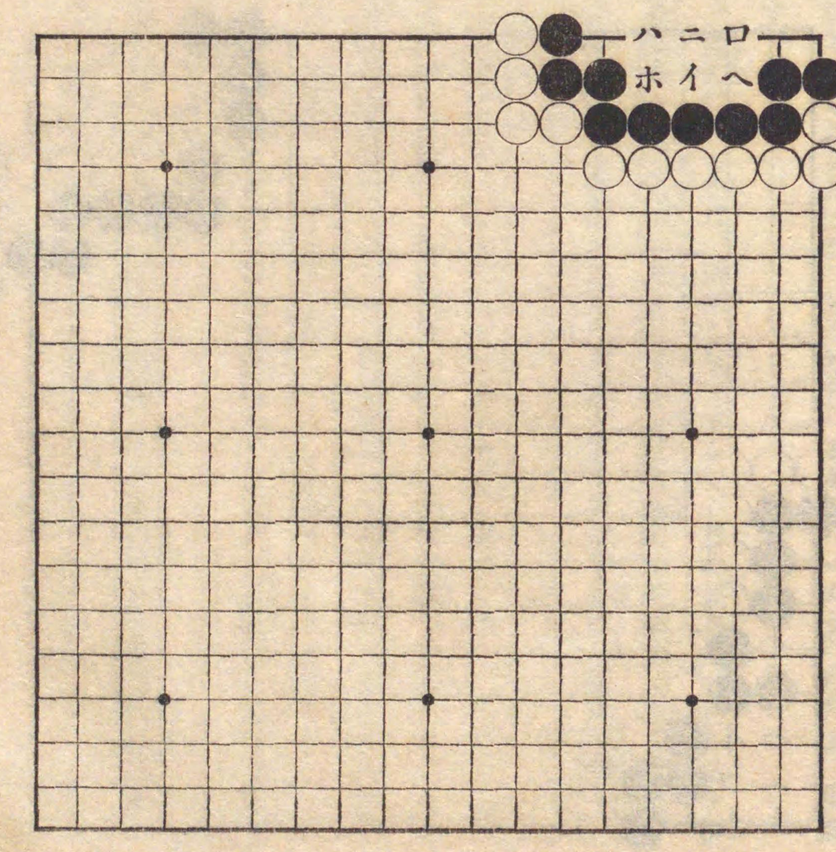
で、若し此條件を具へずして、其圍ひ方が不完全であつたり、又は形惡しく敵に飛込まれて活きられる樣な形であつては、之等はまだ完全な地の形とは云へぬのであります。

圖について見ますと、一圖、黑石で圍つて居る、隅のイ、ロ、ハ等九つの場所は、最早如何に白

から手段を施らしても侵入の餘地無き完全のものであります。

若し此中へ假りに白イに打込んで來たとするも黑はロに應け、白ハに打つてすれば、黑ニ、白ホ、黑ヘと打つて白死となります。

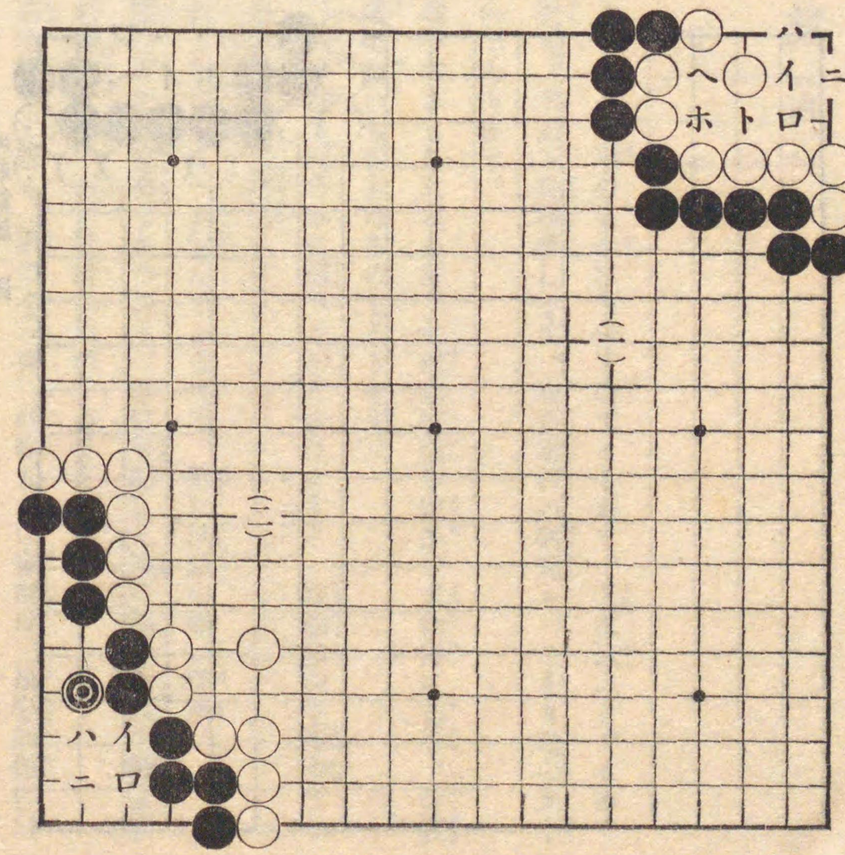
故に、之を黑の地と云ひ、又其數は、イ、ロ、ハ等の交叉點合して九つでありますから黑は九目の地を持つて居ります。



地取篇第一圖

第二圖(一)　白石で圍つて居る隅は、如何打つても、黑から破る方法の無い完全な地であります、で假りに此時黑**イ**に打込とするも、白**ロ**に應け、黑**ハ**、白**ニ**と打つて、隅の黑二目は死であります。又黑**イ**の手を**ホ**に打つても、白**へ**に粘、黑**ロ**、白**ト**に打拔き、黑**イ**、白**ハ**と打つて、之も黑死であります。

斯樣に黑打込み、白之に應じ、結局圖の樣に黑死となつた形と、まだ黑が打込まぬ前の地の形と、其地の大さに增減があるかと云ひますと、之は全く同じでありまして、俗に之を「地入りハマ入り」と云ひ、其數には少しも異りは無いのであります。



地取篇第二圖

之は何う云ふ譯かと云ひますと、提石のある處は、地から見ますと、一目の提石は二目の地と計算し得らるゝので、之は終局地を計算する時、提石は其まゝ取り上げて敵の地を塡め、且つ取去つたあとに、我一目の地を殘しますから、つまり敵の一目の地を減らすと共に、我一目の地を增す、つまり二目となる譯であります。

圖について見ますと、假りに(一)で黑がまだ一石も打込んで無い形と、黑**ホ**、白**へ**、黑**ロ**、白**ト**となつた形と比較して見ると、まだ一石も打込んで無い形で白は、十目の地を持つて居ります。又黑**ホ**、白**へ**、黑**ロ**、白**ト**となつた形で、白は**ホ**と、**ロ**との二目を取去つて見ますと、あとに八目の地を持つて居ります、之に白二目のハマを加へ、つまり十目で、少しも異りはありませぬ。

(二)、隅は黑の地となつて居ります、此形**イ**と切られる缺點はありますが、此缺點は黑◎で補つて居りますから、白から乘ずる隙はありませぬ。

假りに白**イ**に切つたとすると、黑**ロ**、白**ハ**、黑**ニ**と打つて黑勝。又白**イ**に切る手を、**ニ**に打込みますと、黑**ロ**、白**ハ**、黑**イ**に粘ぐまでゞ同じく白死であります。

地になる形と、地にならぬ形

第三圖　前圖は完全な地の形でありましたが、地は前述の通り、少しの缺點も無いを條件とするので、其間若し少部分でも缺點があれば、其缺點を衝かれて、地を減らされる事となります。

故に同じ樣な形に見へても、僅かな缺點の有無で、地になる形と、地にならぬ形との別があります。

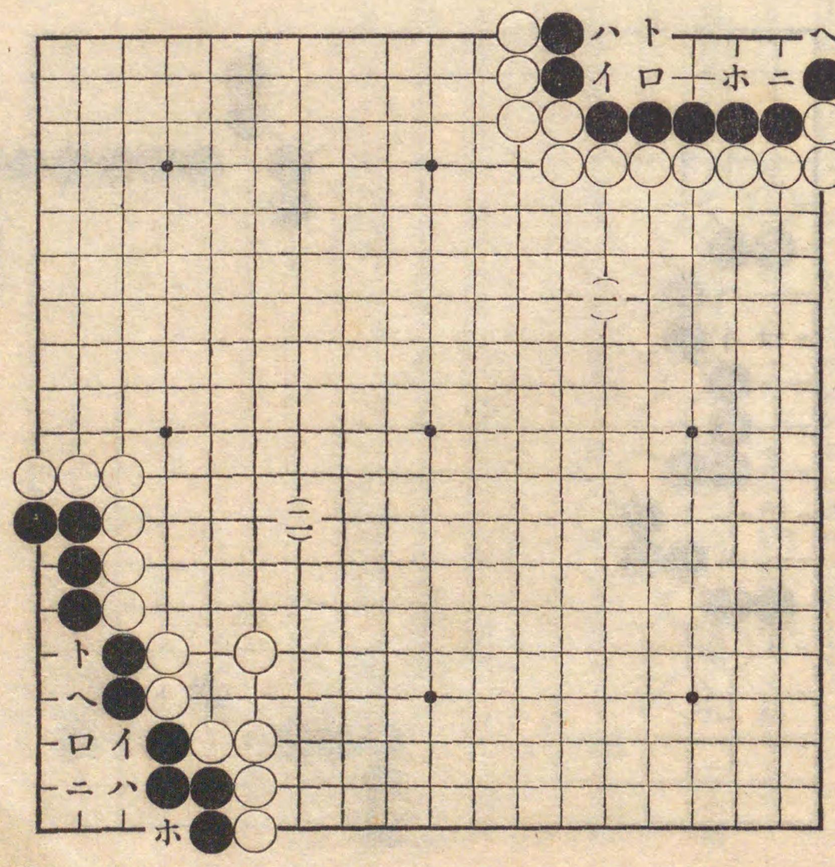
三圖は、まだ缺點のある不完全な地の形の一例であります、此中(一)は一圖と似て居り、(二)は二圖(二)と似て居ります。只(一)は一圖に比較して**イ**と**ニ**に着手なく、又(二)は二圖(二)と比較してへに一手缺けて居ります。

故に(一)では、白に**イ**と切られますと、黑は二目を助ける方法無く、黑**ロ**に打てば、白**ハ**の打拔となるので、白に二目を取られた上、**ロ**、**ハ**、**ト**の地を減らされます。

又白から**ニ**に切る手もあります、斯う打たれると、隅の黑一目は助ける手無く、黑**ホ**、白への打拔となります。

(二)、此形も白から**イ**に切られる手が殘つて居ります、此時に黑**ロ**に打てば、白**ハ**、黑**ニ**、白**ホ**の五目打拔となり。又黑**ロ**の手を**ハ**に打つと、白**ロ**に行び、黑へなれば、白**ニ**と打つて攻合白勝となり、又白への手で**ニ**に打つと、白に**ト**に切られて、上の黑の二目を取られてしまひます。

故に此形も、黑は前圖(三)の樣に、へにあるか、或は此へが、**イ**或は**ロ**とありて、初めて黑は完全な地と云ひ得るのであります。



地取篇第三圖

第四圖　(一)、(二)、(三)

共に、まだ不完全な地の形であります。

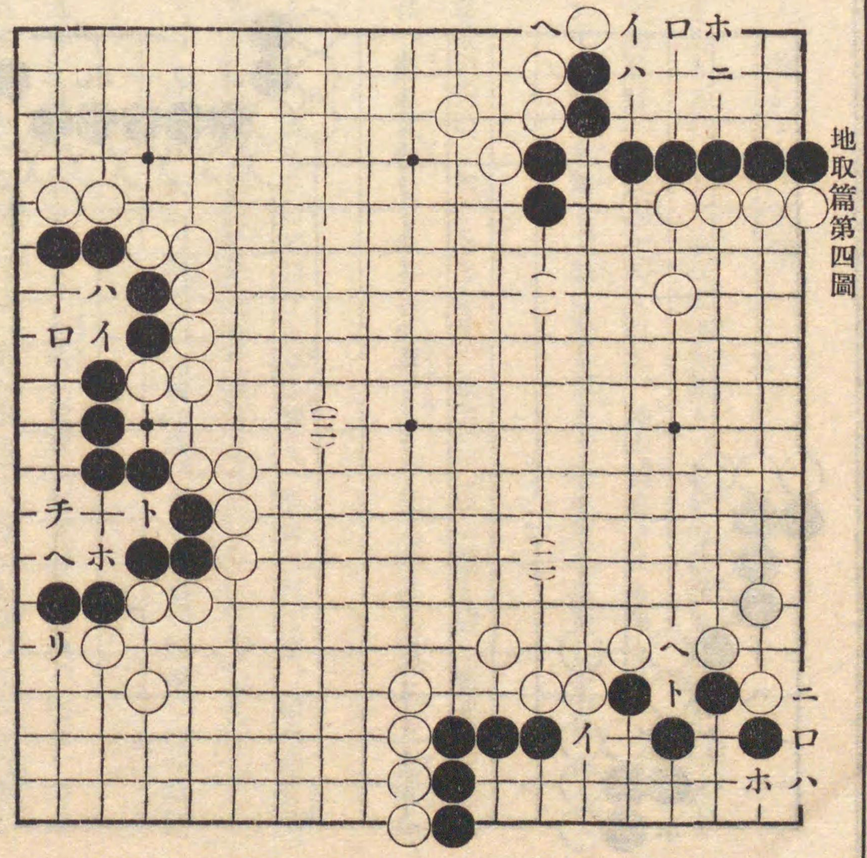
此中(一)、隅は黒の勢力範圍で、殆んど黒石で圍つてありますが、只一つ**イ**に缺點がある爲に、此時白の先手で**ロ**に飛び出すと、黒**ハ**、白**イ**、黒**ニ**、白**ホ**と何處までも侵入し、折角黒の勢力範圍であつた此一隅も、殆んど地とする箇所は無くなつてしまひます。

故に斯かる形では、黒先**イ**に約へ、白**へ**に粘、黒**ハ**と打つて初めて黒の地となるので、黒は斯う打てば、隅に十三目の地を作る事が出來ます。

(二)、此形は、隅は黒の地になりかゝつて居りますが、只一つ、**イ**點に缺點が殘つて居ります。若し此處を白から突出されると、黒は地を破られるばかりでなく、石を二つに斷ち切られ、左右何れかの黒を取られてしまふ結果となります。

故に此形では、黒先**イ**に應け、白**ロ**なれば、黒**ハ**、白**ニ**、黒**ホ**、白**へ**、黒**ト**となつて、初めて完全な黒の地と云ふ事が出來るのであります。

(三)、之も黒は不完全な形であります、先づ一方、白**イ**と切る手があります。黒**ロ**なれば、白**ハ**に二目打拔となり。又一方白**ホ**に切る手があります、黒**へ**に打てば、白**ト**に三目打拔となり、又黒**へ**を**ト**に粘げば、白**へ**、黒**チ**、白**リ**となつて攻合白勝となり、從つて黒は其れ丈、地を減らされる事となります。

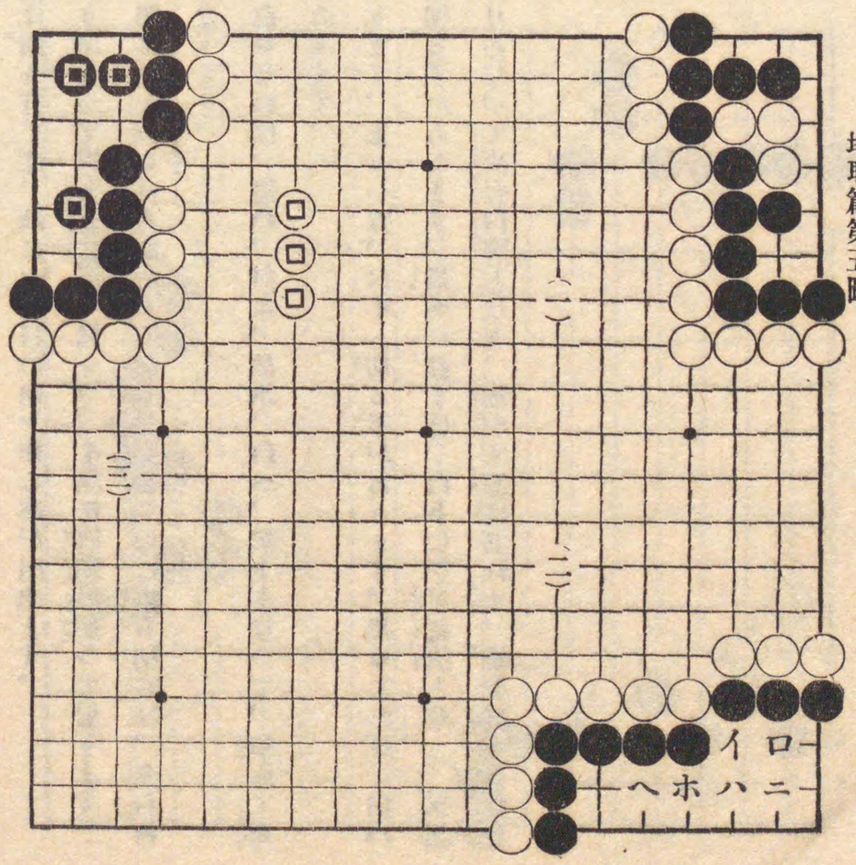


地取篇第四圖

死活と地の關係

第五圖　二圖で僅かに說明致しました通り、死活と地とは密接の關係あるもので、石の死活は即ち地の大小となり、又地の大小は死活の變化を經て初めて確定するのであります。

故に碁を圍むには、常に地と死活とに注意し、地を圍ふには、それに伴ふ死活の變化を考へ、又石を捉るには、其れが地として何れ丈の價値あるものかを一考して後、初めて着手しなければならぬのであります。



地取篇第五圖

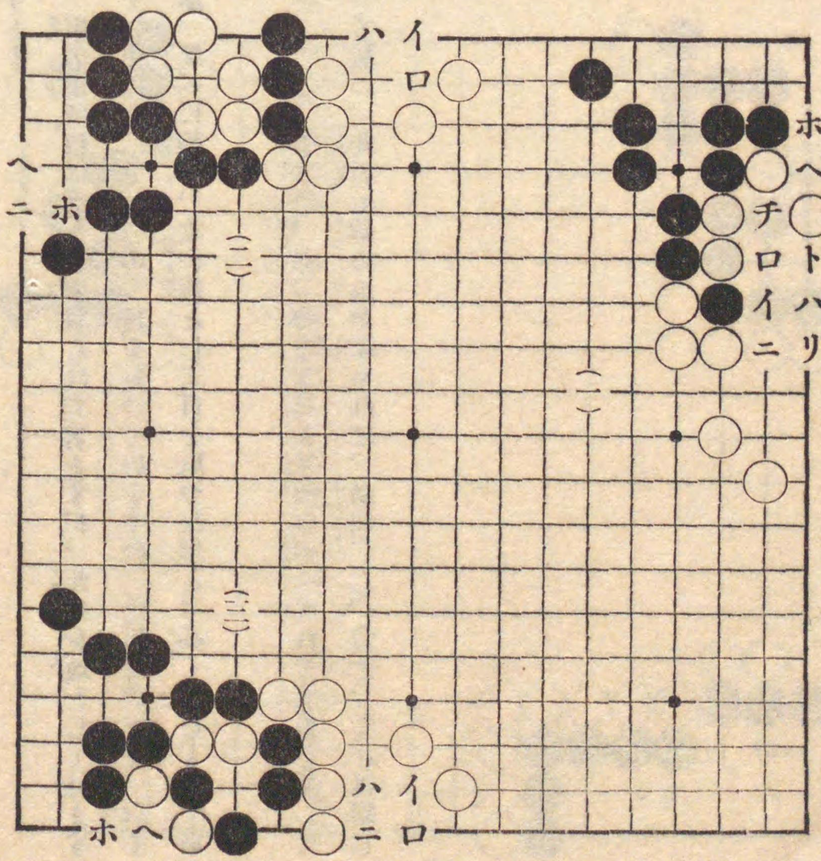
今(一)の例によつて見ますと、隅の白三目は攻合負で取られて居ますが、此形を地として見ますと、丁度(二)と同じ廣さのもので、黑は(一)では白の三目を取つて居ますが。此形は(二)で、白**イ**と切り、黑**ロ**、白**ハ**、黑**ニ**、白**ホ**、黑**ヘ**に約へ、攻合勝とし三目を取つた形と、全く同じものであります。

猶此地の廣さを計算致しますと、(三)、黑は◎、◎、◎の三目を我地の中へ入れて其數を減して居る代りに、白◎、◎、◎を取つて居て、此石で敵の地を塡めれば、結局(一)、(二)、(三)は同じ廣さの十五目となつて居ります。

第六圖　之も攻合の勝負の、地に及ぼす關係を圖示したものであります。

今(一)の形で、此時黑**イ**に行出したとして、扨、此勝負の地に及ぼす關係は如何かと云ひますと此時白**ロ**に應けますと、黑**ハ**、白**ニ**、黑**ホ**、白**ヘ**に打て、其形は(二)と同じとなり、完全な白の地となります。(之を眼有眼無の攻合と云つて、眼形の無い黑三目の敗となつて居ります。四卷眼有眼無攻合參照)

處が初め黑**イ**に下つた時、



地取篇第六圖

誤つて白**ロ**を、**ニ**に打ちますと、次に黑**ト**に尖附ける手が善い手で、次に白**チ**に粘げば、黑**ホ**、白**リ**、黑**ヘ**と打つて攻合黑勝。又白**チ**に粘ぐ手で**リ**に下れば、黑**チ**に打込、丁度(三)の形となり、之も黑勝となります。

でありますから此攻合の形では、初め黑**イ**に下つた時、白**ロ**に打つ手が善い手で、次の變化の樣に白**ニ**に打つ手は惡手であります。

斯樣に一手の打違ひは攻合の勝負となり、此攻合の勝負は地の大小となるのであります。今(二)と(三)とについて地の相違を比較致しますと、先づ(二)の白の地の廣さは、三目の提石を六目に計算し、之に**イ**、**ロ**、**ハ**以下七つの地を加へますと、白は合して十三目となつて居ります。

之に對し、黑の地は**ニ**、**ホ**、**ヘ**以下隅に十二目を持つて居りますから、之は白が一目多くある譯であります。

處が(三)の形、で見ると、白は**イ**、**ロ**、**ハ**、**ニ**の四目丈で、之に對して黑は隅の十二目と四目の提石八目と、**ホ**、**ヘ**の二目を加へて二十二目となつて居ります。

死活篇（其四）

死

第二十五圖　前に說明した死の形は、皆絕對の死、如何打つても活の無い其儘の形でありましたが、實戰では、死活はこんな簡單な決まつた形で、盤上に出來るもので無く、他の石との關係上色々複雜した形となつて、盤上に現はれるのであります。

故に本圖以下は、まだ死活の判然せぬ石について、之を如何打てば、死或は活とする事が出來るかと云ふ、其變化について研究する事と致します。

先づ(一)圖、此形で黑先如何に打てば死とする事が出來るかと云ふと、黑**イ**と置きます。次に白**ロ**に約へても、黑**ハ**、白**ニ**となるので、**イ**點は一眼、猶後に白**ホ**に綽ねても、黑は**へ**に堅く守つて居て、**ト**は缺眼となつて居ります。

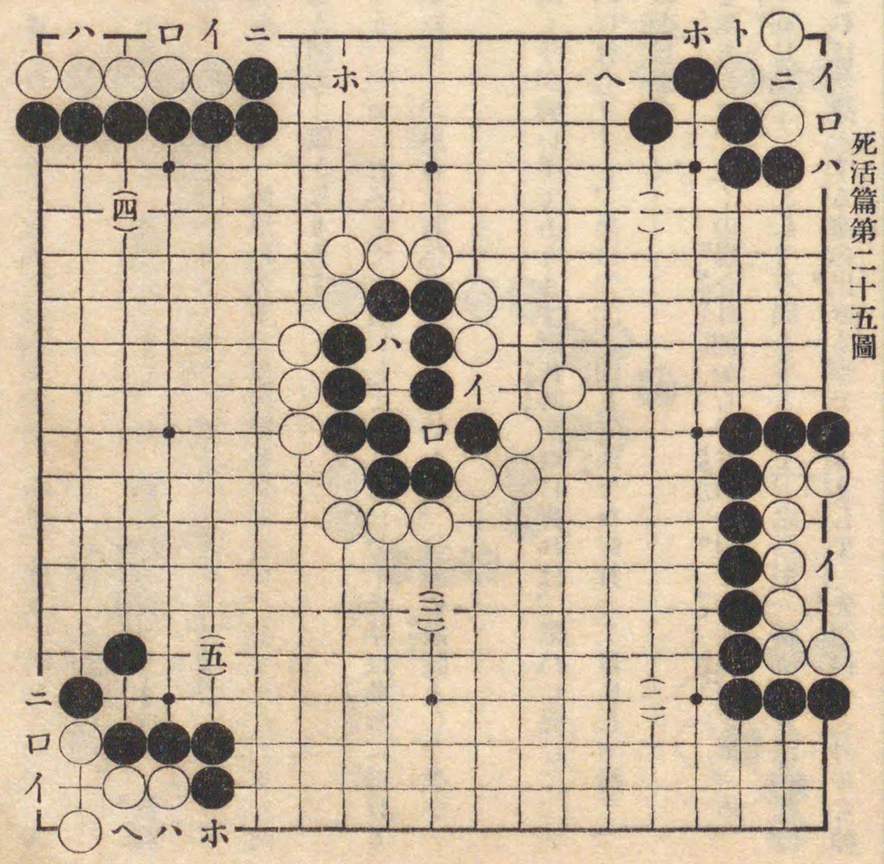
(二)、黑先**イ**と打ちます、此要所に黑に打たれては、最早白は活路は無く、一眼となつてしまひました。

(三)、白先**イ**に打つて、**ロ**を缺眼とします、斯う打つと、黑は**ハ**の方面に二た目ありますが、前

述の通り、之はつまり一眼であつて、黑は一眼缺眼の死となります。

(四)、黑先白死、圖は、前に比較して、稍變化の多い形であります。で此形で、黑先手で、白の眼を取るには、先づ、黑**イ**に綽ね、白**ロ**に約へれば、黑**ハ**と要所に打つて隅を一眼とし、白次に**ニ**に提るも、黑**ホ**に應け**イ**は缺眼となつて居ります。

(五)、黑先白死　黑先**イ**に置きます、白**ロ**に約へ、黑**ハ**に綽ねて、白を一眼とします。



處が此形、若し黑手順を誤つて、イに置く手を、只ハに綽ねますと、白イ、黑ニ、白ロ、黑ホ・白ヘと打つて二眼活となります。

第二十六圖(一)白先黑死　白先イに點して、黑死とします、ロ、ハに活力はありますが、無論之等は、外に發展し得る場所で無く、又隅は前述の通り、結局一眼となる形であります。

(二)白先黑死　之も(一)と殆んど同形で、此形白先手で黑の眼を取るには、先づイに置き、次に黑ロに打てば白ハと打つて、前と同形一眼となります。

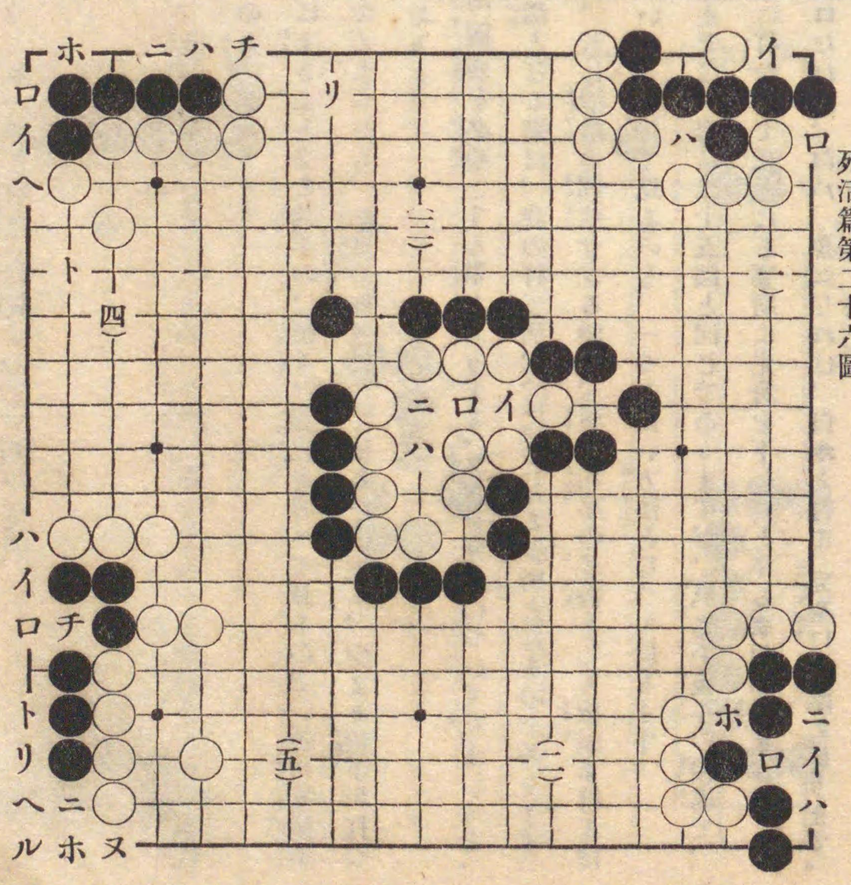
又黑ロに打つ手をハに打ちますと、白ロに打込んで二目にして捨てるので、此手は此形に於ける大層善い手であります。黑ニに取れば、黑猶ロに打込、黑イに提つた時、白ホに缺眼とし、黑を一眼缺眼の形とします。

(三)黑先白死　黑先イと打缺く手が善い手であります。此時白ロに提れば、黑ハに點して、一眼缺眼とし。又白ロに取る手をハに打ちますと、黑は(二)と同じ方法でロに打て二目にして捨て、白ニに打拔、黑猶イに打て、缺眼とします。

(四)白先黑死　總て敵の眼を取るには、多くの場合外側から、其石の眼を作る範圍をセバめ、相手の之に應じた時、初めて其中間に點(ナカデ)して一眼とするので、之れが一番宜い方法となつて居ります。(四)圖も此方法によれば、死とする事の出來る形でありまして、先づ白イと外から綽

ね、黑ロに應け、白猶ハより綽ね、黑ニの時、初めて白ホに點して一眼とします。猶次に黑ヘに取れば、白ト、黑チ、白リと輕く黑にアタらず、應じて居れば、之等は皆缺眼で、眼の組織は、黑は只ホに一つよりありませぬ。

(五)白先黑死　白先イに綽ねて、黑の眼を作る範圍をセバめ、且つチ點を缺眼とし黑次にロに打てば、白ハに粘黑ニ、白ホ、黑ヘ、白トに點し、黑を一眼とします。又黑ヘに打つ手をトに打てば、白



死活篇第二十六圖

へ、黑リに打つも、白又となつて、此への一目提は缺眼となつて居ります。

活

將に一着を下さふとする時に、扨其手が善い手であるか、又惡い手であるかを判別するに、主觀的觀察と、客觀的觀察との二つの方法があります。

主觀的觀察と云ふのは、將に下さふとする其手の、種々な變化を考へて見るので、次に客觀的觀察とは、反對に若し相手の手番であつたら、此形で如何打つて來るかと云ふ、つまり相手が打つて一番善い手を考へて見るのであります。

で碁には時として、此客觀的觀察を必要とする事もあります。又之を死活について見ましても、總て相手に打たれて、死、又は活となる點は、我の打て活、又は死となる要所となるのであります。

でありますから、實戰に際し、若し活路の判然せざる時は、逆に相手の手番として扨何ふ打てば死となるかと云ふ、其要所について一考して見るのも、一つの良い方法となつて居ります。

第二十七圖　(一)以下(四)までは、形は二十五圖と同じでありますが、只先手後手の相違で、此四つとも、先手で活（即相手に打たれて死となる要所に先着を下し）とする事が出來ます。

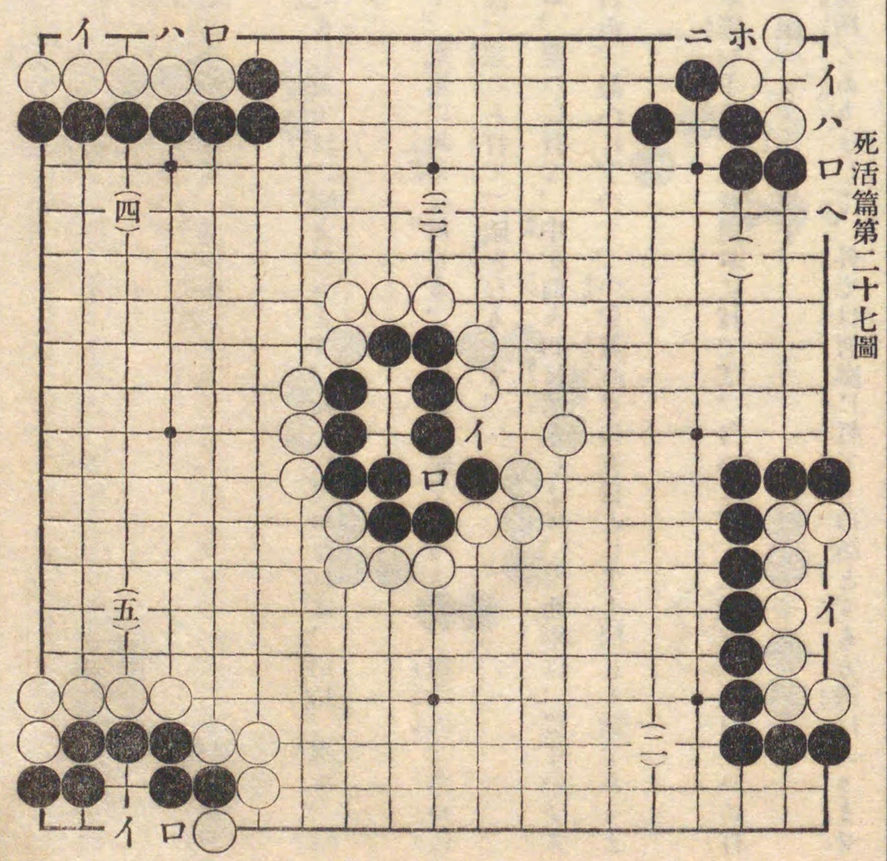
(一)は、白先イに眼作り、黑ロなれば、白ハ、黑ニなれば、白ホと打て、完全に二眼となります。

又黑ロをハに打てば、白ロに一目打拔、黑へ、白ハと打つので、之も無論白活であります。

(二)白先活　此形は簡單で白先イに打てば、完全に二眼となります。

(三)黑先活　黑イに打て、ロを完全な一眼とすれば、黑活となります。

(四)白先活　此形は白先イに打ち、黑ロなれば、白ハに打つも、活でありますが、それよりは、白イの手をロに打ち、中を直行四目の活（此形



は二十四圖にあります）とする方が優つて居ります。

（五）黑先活　此形も黑先イと打てば、完全に二眼となりますか、それよりはイをロに打ち、中を曲り四目の活とする方が優つて居ります。

で此優ると云ひますのは、死活の問題で無く、地の優劣でありまして、之については、次の地取篇の中で說明する事と致します。

第二十八圖（一）白先活　白先イに打てば二眼となります、此時に黑ロなれば、白ハ、黑ニ、白ホと打てば、宜しい譯であります。

（二）黑先活　黑先イと打つので、此處は此形に於ける、最緊要の點であります。扨此時、白ロに來れば黑ハ、又白ロをハに打てば、黑ロと打て二眼となります。

（三）黑先活　黑イに下り、白ロ、黑ハに打て、中を曲り四目活とします。又此形は、黑イの手をロに打ち、白イなれば、黑ニ、白ホ、黑ヘに下つて、中を眞直ぐの五目としても同じく活であります。

（四）白先活　白先イと打つ手が善い手で、此時黑ロに打てば、白ハに打て二眼。又黑ロをハに打てば、白ロに打て、ニとハとに一眼づゝを作ります。

で此形はイ點が、白活とする急所でありまして、外では何處に打ても白活とする方法はありませ

ぬ。其例は此形で、イをホに打つとしますと、黑ロ、白ニ、黑ヘ、白ト、黑チと打て、白は一眼缺眼の形となります。

又白ホをロに打ちますと、黑イに打ち、白ホ、黑ヘと打て中は一眼の形となります。

（五）白先活　白イに眼作り黑次にロに當てれば、白ハ、黑ニ、白ホと提つて二眼となります。又此手順の中、黑ロの手をハに一目提れば、白ロに打て、次に黑よりホに入る手無く白二眼となります。

又此形も、白活とするには

死活篇第二十八圖

イ點が要所であつて之れ以外では、何處に打ても、白を活とする手はありませぬ。

攻合

攻合についての大要は一卷で説明した通りでありますが、此攻合には、種々樣々變つた形がありますから、以下順を追ひ夫等の普通實戰に出來るものを説明する事と致します。

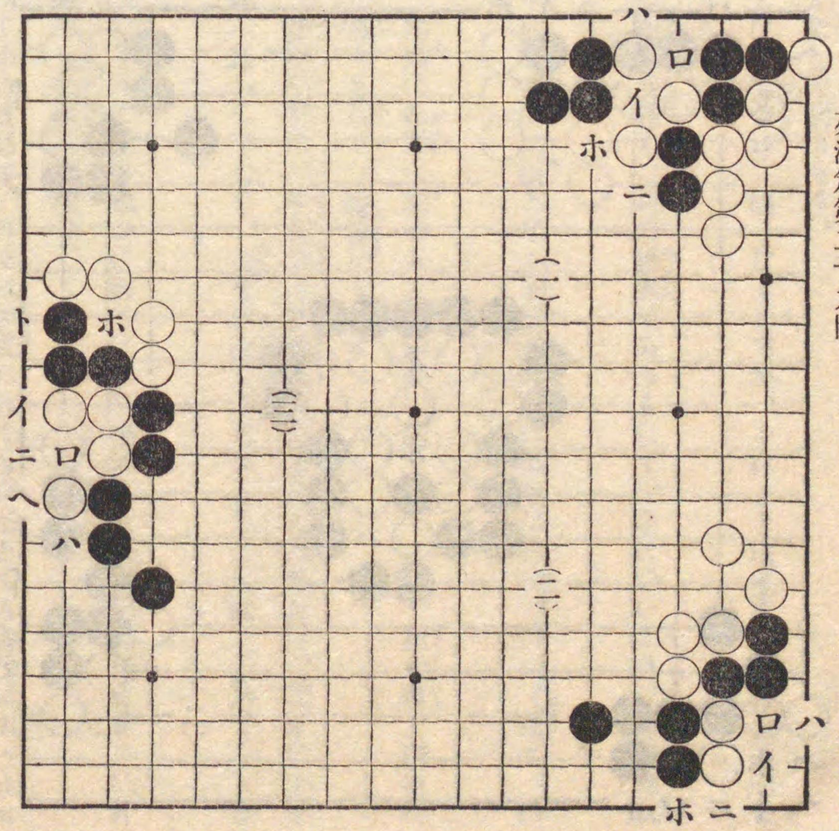
第二十九圖(一)黑先攻合勝

黑先手で攻合勝とするには、先づ黑イに當りとし、白ロなれば、黑ハに當りとします。處が同じ黑から當りとするにも、イを、ロの方から當りとすると、白イに打て上の一目と接續し、黑ニ、白ホと打て、外に逃出してしまひます。

(二)黑先攻合勝　手數は黑三手、白三手、黑先でありますから、黑イ、白ロなれば、黑ハ、白ニ、黑ホに當りとして勝とします。

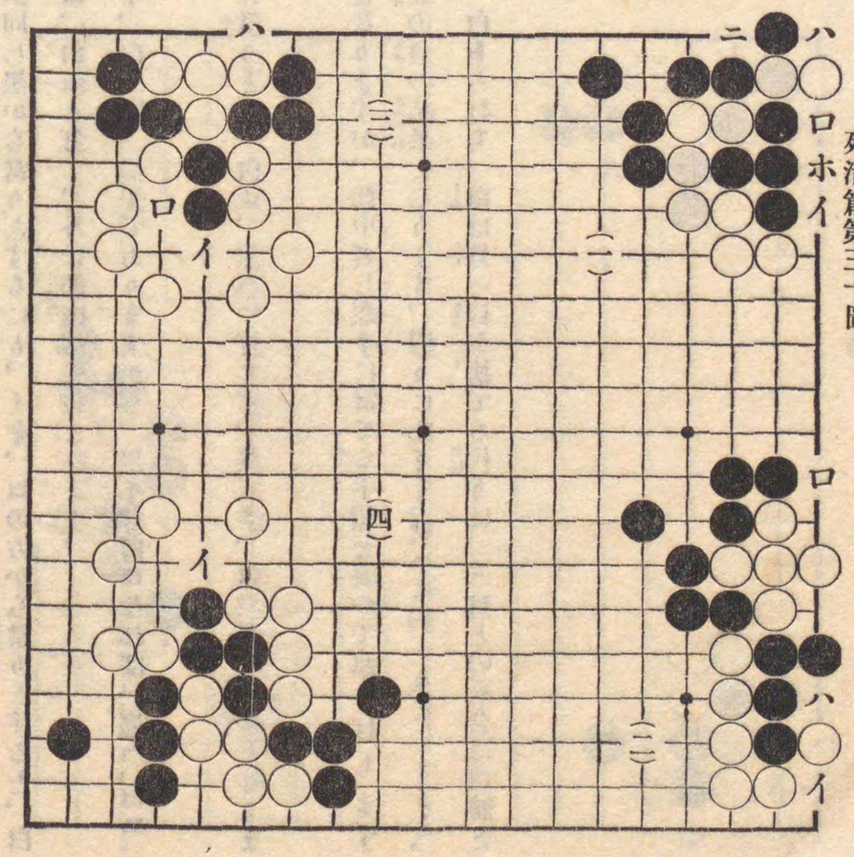
(三)黑先攻合勝　此形黑先イに當りとし、白ロ、黑ハに打てば、黑三手、白二手で黑勝となります。

で斯ふ打てば極く簡單に黑勝となりますが、此中若し黑イに當てる手順を誤つて他に打ちますと、六ヶ敷變化となつて、却て黑の負の結果となります。假りに此イで、只ハに約へるとしますと、白イに下り、黑ニ、白ホ、黑ヘ、白トと打ち、白は只一目を捨てる代りに、三目との攻合は白勝となります。



第三十圖　(一)白先攻合勝　只活力丈を見ると、(一)と(二)の白は二つでありますが、手數にすると、此二つの活力が三手打たなければ、ッメられぬ形であります。

先づ(一)について見ると、此時白先イにツメますと、手數は白二つ、黑二つで此處で假りに黑先でありましても、黑からはロ或はハの何へも直かにツメる手は無く、先づニに粘いで、それから掛らなければなりませぬ、そこで白ホ、黑ハに打てば、白ロに打つ



死活篇第三十圖

て、四目を打拔いてしまひます。

(二)白先攻合勝　之も(一)と同じ形で、白先づイに粘ぎ、黑ロの時、白ハに當りとして勝とします。

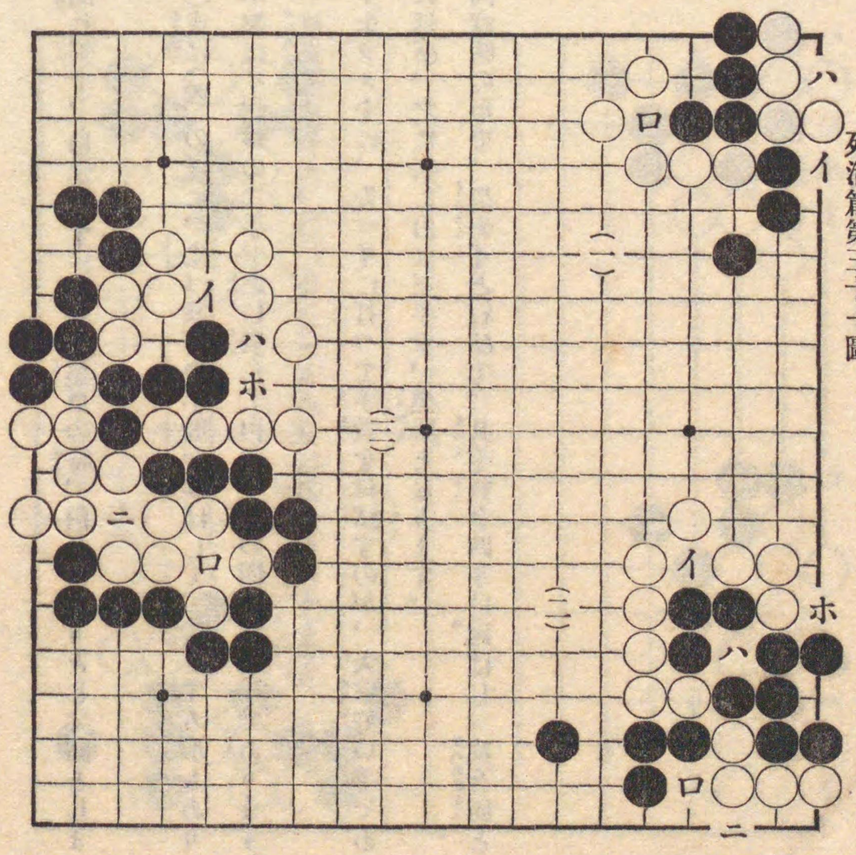
(三)黑先攻合勝　攻合には(三)或は(四)の樣に、先づ我石の手數を延ばして、勝とする形もあります、(三)について見ると、此形黑はイ、ロの二手、之に對し、白の下邊の四目は三手でありますから、此處で直ぐ、黑ハにツメて攻合とすると、白にイと當りとされ黑負となります。

故に此形では、黑は直ぐ白の手をツメずに、先づイに打つて手數を延ばすのが、大層好い手であります。斯ふ打てば、黑は四手に延び、之に對し白は三手で、黑勝となります。

(四)黑先攻合勝　之も(三)と同意味の形で、黑先イと行びて、其手數を四手に延ばし、攻合勝とします。

第三十一圖　此圖は(一)(二)、(三)共に一方は一眼を持ち、一方は一眼も無い石の攻合であります、一眼と云つても、手數にすれば矢張り一手で、普通の活力と少しも異りは無く、之等の石が攻合となれば、只手數の多少によりて勝負は決せらるのであります。

處がまた此眼有眼無の攻合では、形によりて大に眼の有る方が有利な場合もあるので、手數は足りぬ樣であつて、却て勝となる事もあります。



す。(四卷眼有眼無攻合參照)

で圖の形では如何かと云ふと、之れは(一)、(二)、(三)共に、眼の有無に關せず、只手數の多少によつて、勝負は決せられます。先づ(一)では、黑先イに打ち、白ロ、黑ハに當りとし攻合勝となります。

(二)白先攻合勝　此攻合では、白先づイに當りとし、黑ロ、白ハに三目提、黑ニ、白ホに當りとして勝となります。

(三)白先攻合勝　白先イとツメ、黑ロに二目打拔、白ハ、黑ニに四目打拔、白ホに當りとして攻合勝とします。で此攻合では、上の白六目は、打拔かれても、此石は攻合には何の關係も無い石であります。

猶前の死活の部で、死石は結局斯ふ打てば打拔けるものとの說明は、其必要はつまりこうした攻合の場合に起るのであります。

死活練習（二十五目の實戰）

前に説明致しました通り、二十五目の置方は、割合に中に多く、邊遇に手薄でありますから、從つて其應答は、黑は中では割合に樂でありますが、邊隅となる程、だん〳〵六ヶ敷なります。で此處には二十五目の中では變化の一番六ヶ敷隅について説明する事と致します。

第七圖　について見ますと、初めに、白一と隅に打込、次に黑二に約へた時、白は強く三と切違つたのであります。

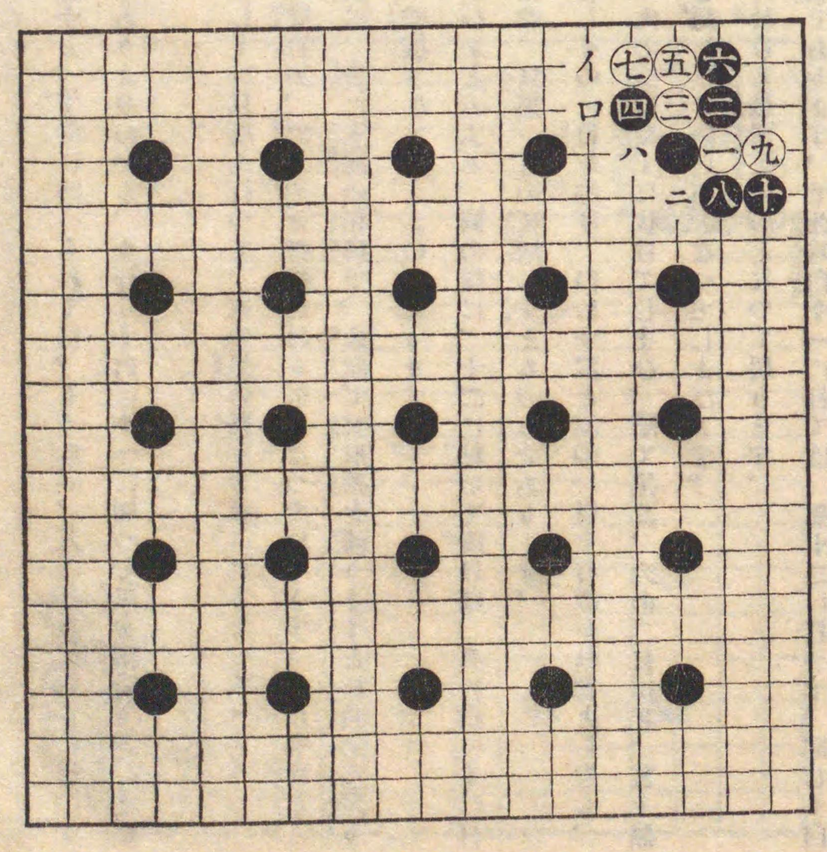
（此白三の切違は穩かに八に引く手もありますが、其變化は三卷二十目の實戰の中で説明する事と致します）

で圖の樣に一、二、三と切違つた時は、黑は星の石を二或は八に行びるのが一番確かな應手となつて居りますが、又圖の樣に、黑四に當りとし、白五、黑六に約へて、直ぐ之等の石と攻合とする強い打方もあります。

扨此時（黑六に約へた時）、白は双方の形を見ると、白の三、五と黑の二、六と相對し、又白一と黑●と相對して居りますが、只此形、黑に四の一手が多くある爲に、黑二、六の活力三ッに對し、白三、五は活力は二つであります。故に白は直ぐ攻合としては、負でありますから、白は先づ此石の手數を延ばす爲に七と打つたのであります。

此時黑強いて、三目の手數を縮めようとイに打つ手は、斯く黑に缺陷のある形では無理でありまして、斯ふ打つと次に白に八に兩當りとされ、黑二白ロと打拔かれてしまひます。

處が、一方白一の一目を見ますと、活力は二つで、之も切違の一方の石であり、黑は此一目を取つても勝となる譯でありますから、轉じて黑八に當りとし、白九、黑十に約



死活練習第七圖

へて、其活力を二つにし、此石と攻合としたのであります。

第八圖　(一)で前圖の様に黒十と、下邊に約へられては、もう此一、九の二目は此上發展の工夫も無く、又手數を延ばす方法もありませぬから、止むなく白は十一に切つて黒を兩當りとしました。

しかし之は窮策であつて、白としては只斯ふ打つて、次の黒の應手を試みたまでゝあります。

で此形では、黒は四か或は星の置石か、何うかを打拔かれる形となつて居ります、何れも同じく一目ではありますが、然し其價値は、實に雲泥の相違で、此處て其取捨を誤りますと折角之迄誤りなく打ち來つた碁勢も、一變して破壞されてしまふのであります。

で黒は何らの一目を逃げるが宜いかと云ふと、圖の様に、十二に粘いで置けば、次に白にイに打拔かれても、此一目は其影響する處、只黒一目の死活に止まるのみであります。

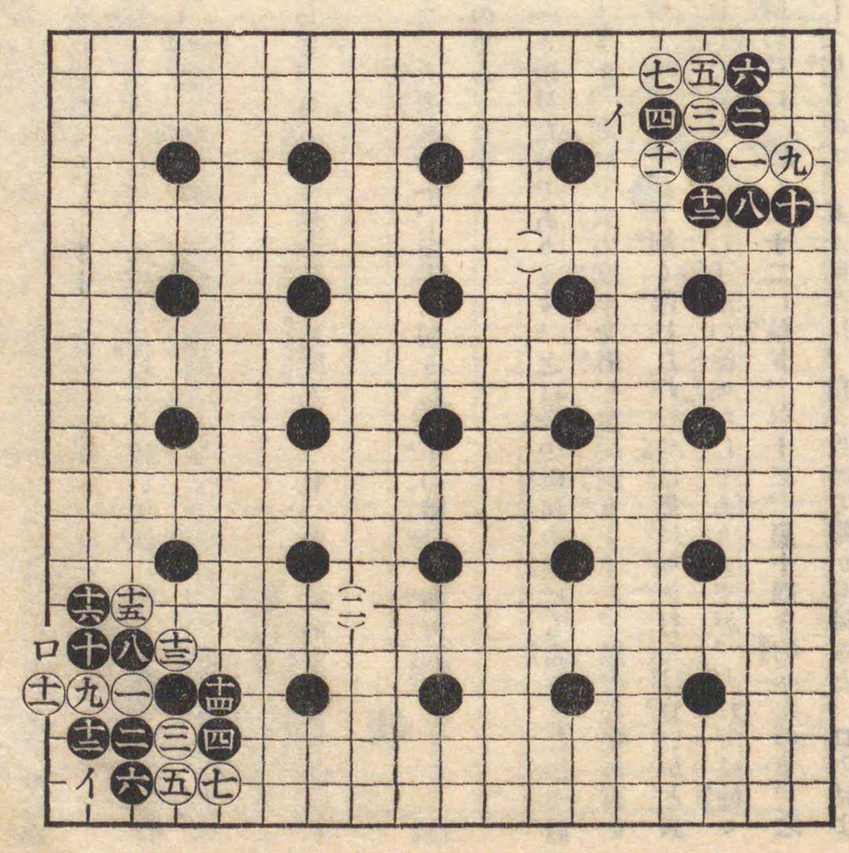
之に反して、黒十二の粘で、若しイの一目を逃げ、白に十二と星の一目を打拔かれたとしたら、それこそ大變で、結果は、白一、九の二目は上に拔けてしまひ、隨て黒二、六の二目は死、其上黒八、十と四、イなどは共に連絡を絶たれて弱い石となつてしまひます。

斯様に此星の一目は、此戰に於ける最緊要の石となつて居ります。

(二)、黒十までは前と同じ手順であります、で此時白十一に打てば、黒十二に打つて、同じく白

二手、黒三手で、白は此上、此石の手數を延ばす工夫も無く黒勝となり。又白十一の手で、十二に打ても、黒イと打ち、白二手、黒三手で同じく黒勝となります。

次に白十三の方から切れば、云ふまでも無く黒十四に粘ぎ、白十五に打つて黒八、十の二目を攻めれば、黒はロと打て三目を當りとして黒勝でありますが、又圖の様に十六に打て、手數を三手に延ばしても、攻合勝であります。



死活練習第八圖

第九圖　(一)白九の手で、前圖の様に十と行びても、黒にイと約へられるまでゝ、此攻合は白敗でありますから、白は圖の様に九に兩當りとし、黒十に打拔、白十一に打拔となりました。

扨之迄で此戰は一段落を告げた譯でありまして、此處で黒は手を拔いて他に轉じて差支へ無いのであります、處が圖の様な形では、差當り他方面に緊急の着點もありませぬから、黒は十二と約へました。

此十二の約へも、白の發展を止めて、ロ方面を黒の勢力範圍とし、且つ白を攻めて居る、善い手であります。

(二)、以上、色々の變化によりて、大要は白一、三と附切りし以下の戰は、如何變化しても、白に勝目は無い、この説明を終つたのであります。

最後に一つの變化、それは白十一と附けた時であります。之は今の處何の黒にも當りとなつて居らず、甚だぼんやりした手でありますが、之れで次の應手を若し黒が誤りますと、黒回の要め石を打拔かふと云ふ、恐ろしい手を狙つて居ります。で斯く附けたれた時は黒は如何打てば宜いかと云ふと、黒ロに粘いで回の一目を確にして置けば、白に手段の餘地なしでありますが、夫れでは餘り働きの無い打方でありますから、圖の様に、强く黒十二に粘ぎ、白十三、黒十四と約へたので、之ても黒回の石を保護する目的は達して居るので、其上此手は、白を攻める點から見ると、ロの粘よ

りは遙に優つて居ります、

處が初め白十一に附けた時、若し黒ロの切の注意を怠つて、十二の手で、十五に行びるとしますと、白十六、黒イに約へれば、白ロに切り、黒十二、白にハと打たれて、此三目を取られ、黒大敗の形となります。

又黒十五に行びる手を十三に打ちますと、白十二、黒ロ、白十六となつて、四、十三の二目を取られます、之は回の要め石を取れる程、黒は惡しくは無いが、矢張り黒損の形

死活練習第九圖

であります。次に本圖の説明にもどつて、白十五に切ると、黑先づ十六に當りとし、白十七、黑十八に打て兩當りを防ぎ、白次に十九、黑二十と守つたので、斯ふなつては白一、九の二目は死、其上下邊の白三、五以下七目の白も、まだ二眼を得るに充分な形で無く、白の大層惡いのは云ふまでもありませぬ。

地取篇（其二）

地と駄目

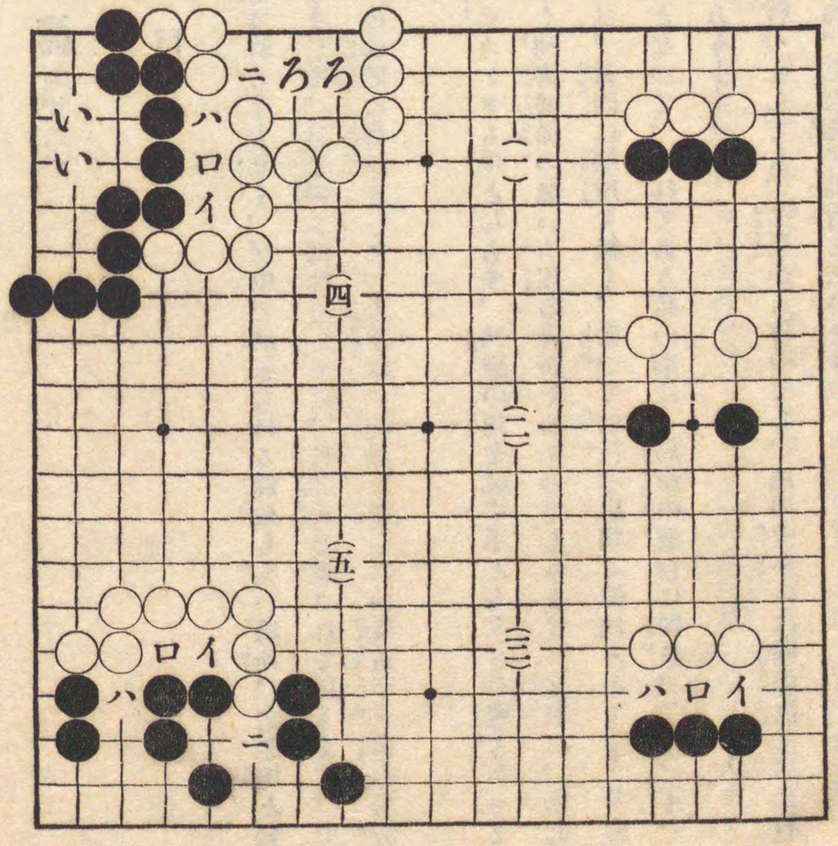
完全に外側を圍んで、敵から侵される手も無く、又中で活きられる餘地も無い場所、之を地と云ふのは前に述べました通りでありまして、地を圍ふ條件としては、只之丈で盡されて居ります。でありますから、地を作るには、前の説明に從ひまして、上手に、敵から侵されぬ樣着手を重ねて行けば宜い譯であります。

處が又局面の形によりては、幾手カケテも地とならず、又敵の地を減す手ともならぬ處もあります。之を駄目と云ひ、駄目とは全く利害關係の無い不用の場所を云ふのであります。其例は、第七圖(一)の樣に、白、黑接した形では、其間に空所も無く、從つて駄目の出來る餘地もありませぬが、(二)の樣に、石が互に一間飛となつて、離れてある時の形は、局面の進むに從ひ、(三)、イ、ロ、ハの樣に空所の出來るものであります。

で斯ふ云ふ點は、假りに白から打つとしても、又黑から打つても、地の大小には關係無く、又石の死活にも多くは影響はありませぬ、之を總て駄目と云ひます。

駄目には色々な場所があるので、(四)圖について見ると、「い」は黑の地、「ろ」は白の地で、互に隅邊を占領して居りますが、其相對するイ、ロの樣な點は、黑白共に、只共通の活力があると云ふばかりで、此處に着手すると否とは、別に利害又は死活に何の關係もありませぬ。

故にイ、ロは駄目でありますが、又同じ樣な場所に見へて、ハは、イ、ロと異つて、一目の地の廣さに關係ある所であります。



地取篇第七圖

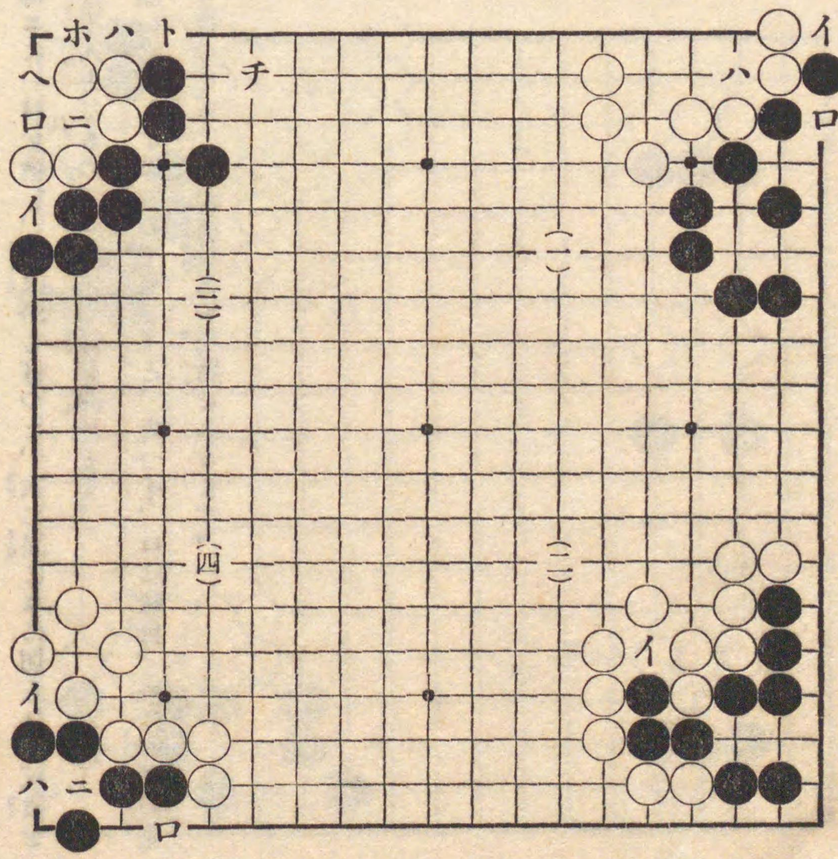
若し此點に白から打てば、白地ニに一目を增し、又黑から打つと、次に黑にニに切られて三目を提られる手が殘るから、白はニに手入となるので此處に一目を減じます。

(五)、此形で、駄目と駄目で無い場所とを區別して見ますと、先づイ、ロは駄目、ハは一目の先手、ニは白から打つても、黑から打つても二目の損益ある場所であります。

有効な駄目

處が駄目であつて、死活攻合に大切な役目を持つて居る處もあります、で斯ふ云ふ點は一般に駄目とは云つて居りますが、只地取から見て駄目と云ふ丈で死活には大切なる場所となるのであります。

（一）、イ點は駄目でありますが、若し此點を白から塞ぐと、黒はロに守り、又白もハに守つて、三目の切取られを防いで置かなければなりませぬ。



地取篇第八圖

（二）、イは駄目でありますが、此駄目のある爲に、黒は三目を打拔かれる手を免れて居ります。

（三）、駄目は又、死活に關係を持つて居る場所もあります、（三）について見ますと、此形隅の白は、黒先ハに綽ねるも、白ホ、黒ロ、白ヘと打て、結局二眼の活となつて居ります。

處が若しイの駄目が塞がつて居ると、黒ハ、白ホ、黒ロと打つた時、白二目は當りとなりますから、白ニに粘、黒ヘ、白ト、黒チと打て白死となります。

（四）も同じ意味の形で、此形で白ロに打てば、黒ハに打て二眼。又白ロの手をハに打てば、黒ロと打て活となります。

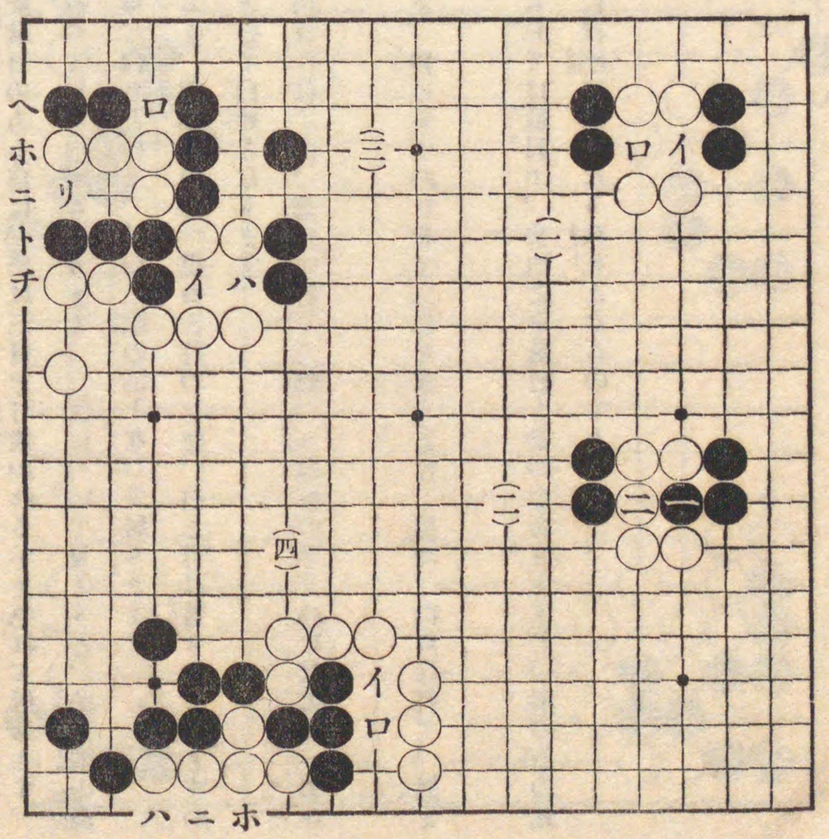
處がイの駄目が塞がつて居ますと、白は先づハに打て二目を當りとし、黒ニ、白ロに打て、黒を一眼とします。

斯樣に（三）、（四）のイ點は地から見ては駄目で、普通之を駄目と云つて居りますが、隅の石の死活には大切な場所で、此駄目の爲には隅は活となり又死となるのであります。

攻合と駄目の關係

第九圖　(一)、白は二重粘の形で、其間**イ**と**ロ**とは駄目となつて居ります。故に(二)の様に黒**一**、白**二**と打ても斯かる點は、打つても、打たなくても、別に差支へなさそうな處でありますが、此駄目の有無は、後攻合なぞになつた時、非常に影響あるのであります。

で斯く黒**一**、白**二**となる様な形を「駄目づまり」と云つて、差當り死活攻合には差障りは無さそうに見へて居て、後に重大な關係を生ずる事もあるのでありまして、之は大層惡い形とされて居ります。



地取篇第九圖

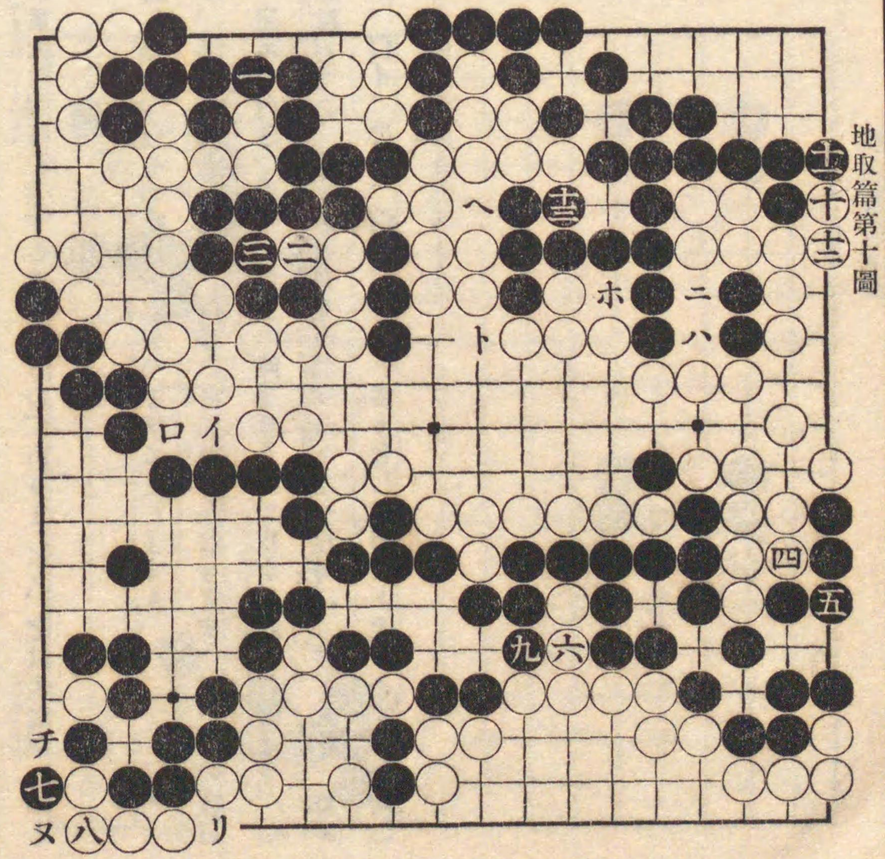
先づ(三)について見ますと、若し黒**ハ**、白**イ**の駄目が塞がつて居るとしますと、此際黒先で**ロ**に攻めても、白**ニ**、黒**ト**、白**チ**、黒**ヘ**、白**リ**と打て白勝となります。處が**イ**の駄目が空いて居ますと、黒**ロ**、白**イ**、黒**ニ**、白**ホ**、黒**ヘ**、白**チ**の時黒**リ**と打て攻合黒勝となります。

(四)も同じで、**イ**、**ロ**は、所謂駄目でありますが、斯く白黒攻合となつた時は、若し此**イ**、**ロ**が空いて居れば、此際黒先**ハ**に攻め、白**イ**、黒**ニ**、白**ロ**、黒**ホ**と當りをして黒勝となります、が若し此駄目が塞がつて居れば云ふまでも無く黒敗となります。

終局に於ける駄目と地の作り方

第十圖　圖は高段者の實戰終局圖であります、で終局圖の形は、地の大小、石の死活、取り石（ハマ）の多少により、千差萬別でありますが、然し地の分布、終局の打方、駄目のツメ方、地の作り方等の研究は、何の終局圖によるも變りは無い譯であります。

先づ黑一に守る手、之は緊要の點で、此點を白から出られると、黑左方の六目を取ら



地取篇第十圖

れた上、地を減らされます。次に白二に當り、黑三に粘ぎ、白四に當り、黑五に粘いだので、此白の二及び四は共に先手一目の得であります。之を反對に黑から二或は四と打つと、黑は三或は五に一目を增す事が出來ます。

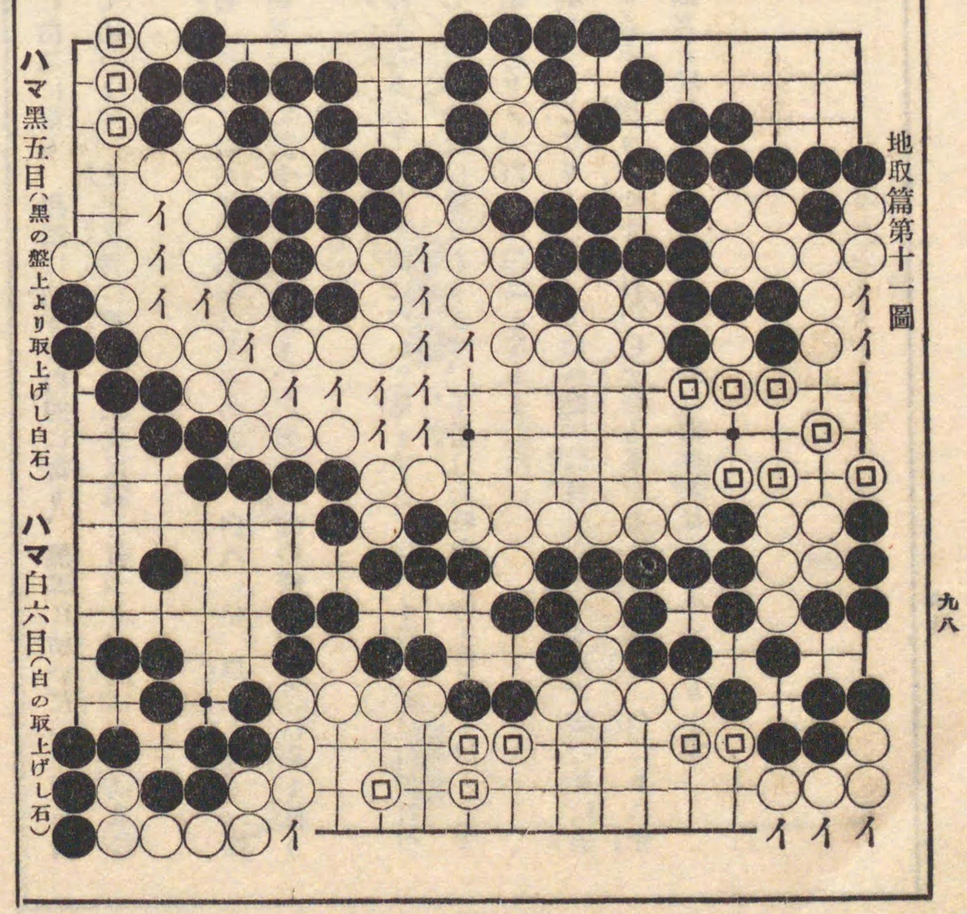
次に白六の一目粘は、前述の通り後手二目の手、黑七は先手の當り、白八に粘、黑九と打て一目を增し、白十、黑十一白十二に粘ぎ、次に黑十三に一目作り、之迄で此碁の侵分（ヨセ）は全く終りとなつたのであります。

扨次は互に駄目をツメ合ふ順序となるので、之を圖について見ますと、先づイ點、之は白が打つても黑から打ても此局面には少しも影響の無い處であります。手番は此時白の方となつて居りますから、白イにツメ、黑次にロの駄目をツメ、白ハ、黑ニとなりました。

次は白ホの駄目ツメ、黑ヘの駄目ツメとなりました、で此ヘ點は駄目でありますが、圖の樣に黑にヘにツメられると、次に、黑からトに切り、此十數目の白を取る手がありますから、白はトに守り、黑チ、白リと各守り、次に黑ヌと駄目をツメて、全く此碁は終りとなつたのであります。

第十一圖　終局の作り方は一卷にも大要を説明致しました通り、先づ互にハマ（ハマとは既に打拔いた死石、或は盤上にある死石を云ひます）黑は白石五つのハマ、又白は黑石六つのハマを持つて居ります。

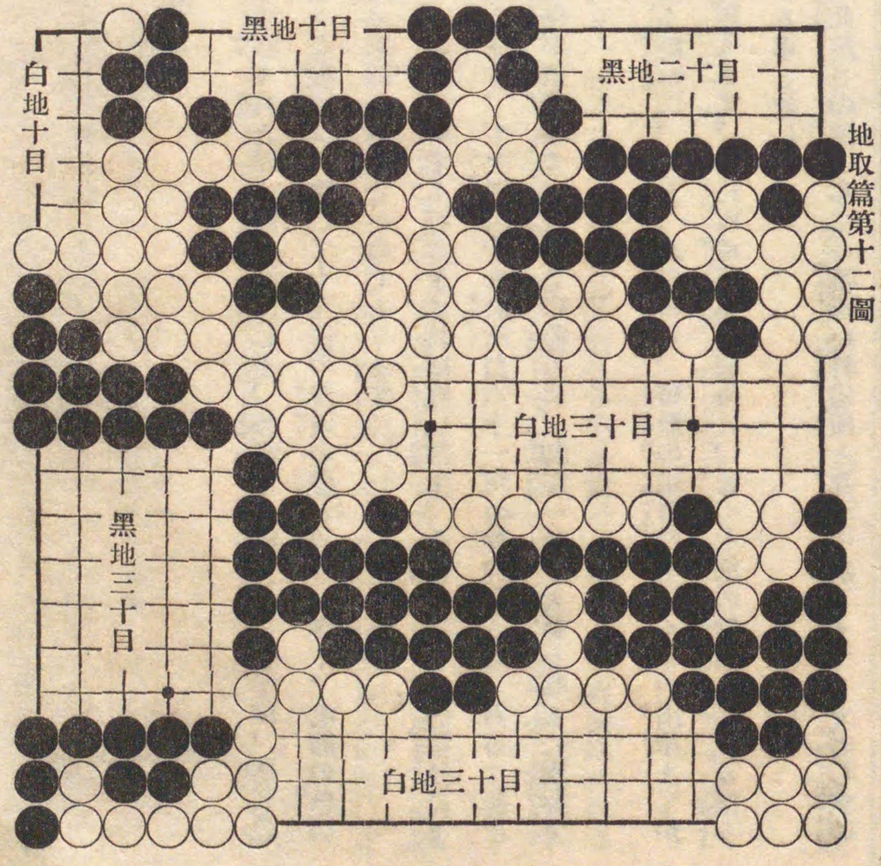
それで白の地を分り易く作り直すには、圖で記した樣に白◎の石を取り、之に取りハマ五つを加へますと、二十一目でありますから、此石でイ點を塞ぎますと、十二圖の樣に大層分り易い白の地の形となります。



地取篇第十一圖

で斯く地を作り直してしまふと、其地の大さに變りがありはしないかとの懸念もありませうが、前に説明致しました通り、元々白の地の中にある白石を取つて、其石で同じく白の地を分り易く、作り直した丈でありますから、無論其數に異りのある筈はありませぬ。又此方法で同じく黑の地を作ると、次圖の形となります。

第十二圖　此圖で見ますと、白は三十目の地二ヶ所、



地取篇第十二圖

十目の地一ヶ所都合七十目に對し、黑は三十目の地一ヶ所と、他に二十目、十目の地各一ヶ所で合して六十目、つまり此碁は白十目の勝となつて居ります。

七筋の盤の對局法

七筋の盤と云ふと、餘り狹過ぎる樣で何となく變化に乏しく、物足らぬ感じがしますが、然し之丈の廣さの盤でも、其中に起る色々な變化は、決して十九筋の普通の盤と異りは無く、七筋の盤の變化は、つまり十九筋の盤の變化の縮圖と見て宜いのであります。

元來盤の廣さは幾つであつても、其れに應ずる打方をすれば宜い譯で、それは人々の技量により、各其廣狹を異にするものであります。で普通の十九筋三白六十一路の盤の廣さは、初めて碁を研究せらるゝ方には、餘り形と變化が廣過ぎて、此廣さの盤では、却て一局の大要を知るに困難であります。

七筋の盤は之と異ひまして、極く簡單に、地と、死活の形、勝敗の歸着點を知る事が出來ますから、此點は十九筋の盤より優つて居ります。故に此地取篇の初めに、先づ七筋の盤面上に起る種々變化の中、其要點を指摘し研究する事と致します。

第十三圖（甲）　黑一の手は、此廣さの盤として一番善い打場所となつて居ります。で若し對等

の力の碁で、斯く一と先着を下すとしたならば、此七筋の盤では、黑必勝の計を爲す事も容易であります。

扨圖の樣に黑に一の要所を占められて後、白の二の着點は何處が宜いかと云ふと、此形では二に打つか或は三と接して打つかの二の方法よりありませぬ。

二は、一から尖の形で、此外にイ、ロ、五の三點皆二と同じく、此四つの中なら、其何れに打つても變化に變りはありませぬ。又三、七、八の三點は四と同じで、皆附の形でありますから、此四つも同じであります。

で此尖附以外の點、チ、トなぞは、如何かと云ふと、之等の點は、前に述べた通り、盤の最終線或は最終線に近い場所でありますから、初めから、斯ふ低い處に着手するのは、如何なる場合にも必ず惡手となつて居ります。

扨白二に着手したとして、次に黑は、先着の効を持て三と石を連續しながら白を約へ、白四、黑五と綽約へたのであります。

次に白、此黑五の約へに對して白六に應ずる手は、位置低く好い打場所では無いが、然し此手で七に切る手は無理（此七の切の變化は次に說明致します）、又六の手で十一に綽れば、黑ル、白九、黑六となつて、一層惡い結果となりますから、止むを得ず白六と綽ね、黑七、白八の行となつたの

であります。

次に黑九、白十、黑十一との綽粘は、此形での唯一の好點で、黑は、此綽粘を打つた爲に、其勝を完ふする事が出來ました。

然し又、白の方で此九の綽粘を嫌つて、八の手で十一に綽ねるとしますと、黑ル、白九、黑八、白又、黑ヲとなるので、之は一層活路を狹められて惡い形となります。

白十二は、幾分黑の地に侵入しようとする手、之に對し黑は十三と守つたのであります。次に白十四の下りは、斯かる局面では、唯一の好點であります。

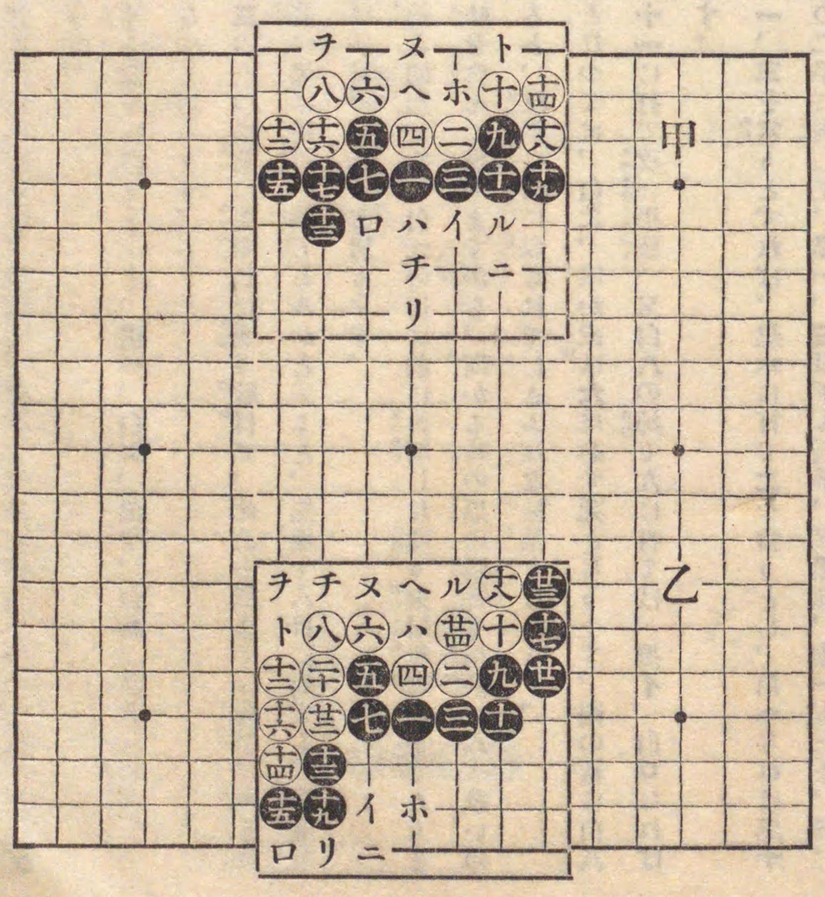
で之れ迄で、大略黑白の勢力範圍は定まつた譯で、白は六、ヲ方面に地を持ち、黑はチ、ニの方面に地を持つて居ります、然し其廣さは、白は一路或は僅かに二路を得て居るに對し、黑は八、チ、リと三路に勢力を占め、白より廣い地域を占領して居るのは明かであります。で斯かる結果となるのは、黑初めに一と最好點を占領して、以下常に攻勢に出で白を壓迫した結果にほかならぬのであります。

此碁は黑十九の約へまでゝ、終局となりました。

扨此碁は黑幾目の勝となつて居るかと云ふと、先づ黑地はイ、ハ、ロ以下二十目。之に對し白地は丁度半數十目で、つまり黑十目の勝となつた譯であります。

乙、黑十三の尖までは甲圖と同形であります、扨此時に白十七と下れば、前圖と同形となりますが、圖の樣に白十四と打てば、黑十五に約へ、白十六の時、黑十七と綽ねるのが善い手であります。

白は止むなく十八に守り、黑十九の粘となります、處が白十八の手で十九に切るとしますと、黑イと打て一目を捨て、白ロに打拔、黑二十四に兩當り、白八、黑十八に打拔となり、此形全部の白が缺眼一眼死となるのであります。



地取篇第十三圖

其變化は、此時白二に打つも、黒ホ、白ヘなれば、黒二十、白ト、黒チと打ち、チの方面は白一眼十五及びリは缺眼となつて居ります。

又此變化の中で、白ヘに下る手を二十に打ちますと、黒ヘ、白又、黒ヲ、白ル、黒十に粘迄で、ヲは一眼、ヘ或は十五は缺眼となつて居ります。

黒二十一、白二十二、黒二十三の三つは前に説明した通り駄目で、此二十三まで丶此碁は全く終局となつたのであります。又此碁は黒は幾目の勝であるかと云ふと、黒地十八目に對する、白地七目、黒十一目の勝、甲圖より黒は一目多く勝つて居ります。

第十四圖(甲)　黒五までは前と同形、次に白六の切は前に説明した通り大層無理な手であります。然し無理丈に、又嚴しい意味を含んで居りますから、斯かる時の黒の應答も相當に六ヶ敷いので、若し此際一着手を誤るとすると、反對に白に取られてしまふ樣な結果となります。

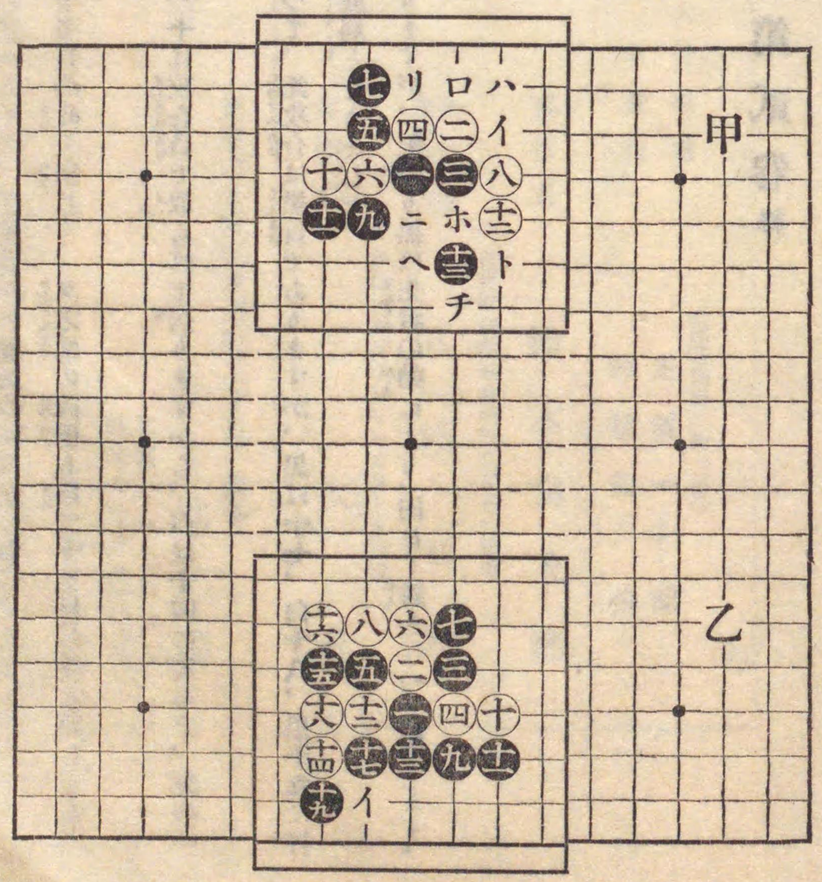
黒七の下りは善い手で、此形となつては、白二、四か或は六は必ず死となります、圖の樣に白八に綽れば黒九に當り、白十、黒十一に打て攻合黒勝。又白八の綽で九に打てば、黒イ、白ロなれば黒ハと打て、攻合黒勝となります。

次に白十二の手で二に切て、一、三を當りとすれば、黒ホに打て二を當りとし、白ヘなれば黒十二と打つので、此形、白六、十の二手に對して、黒一、三以下も三手、又黒九、十一も三手、五、

七は四手でありますから、何れと攻合としても黒勝となつて居ります。

次に黒十三の飛まで丶、此一戰は全く黒の勝となつたのであります。

乙、白二に、接した時の變化は、次に黒三に約へ、白四に切違となるので、之は二十五目置碁の時と同じであります。只盤に廣狹の差があつて二十五目では一隅の變化でありますが、圖では盤全體の變化となつて居ります。又二十五目の星と、圖の黒一とは、



地取篇第十四圖

其最終線への距離は同じで、圖の黑一の手は、丁度普通の盤面の隅の星に當つて居ります。

故に黑十三までの變化は、二十五目の時と同じく、又之迄の說明も前二十五目の時と同じであります。

扨斯かる形となつて、白の四、十は攻合負で取られて居りますから、白は十四に尖んで、五の一目を完全に捕虜としました。

次に黑十五に行、白十六となつて、此攻合は黑負でありますが、黑は十七、白十八、黑十九に打て、イの方面の地を守り無事に終局となりました。

で此形は、互に二目提々てありますが、矢張り黑は先着の効により、同じく勝となつて居ります。

圍碁獨習第貳卷終

昭和六年九月廿六日印刷
昭和六年十月一日發行

（圍碁獨習　第二卷）
定價一圓
郵稅四錢

著作者　鈴木爲次郎
東京市麹町區永田町二丁目一番地

發行兼印刷人　八幡恭助
東京市赤坂區田町一丁目十五番地

印刷所　三京社

發行所　日本棋院
東京市麹町區永田町二丁目一番地
電話銀座七〇五番
振替東京六八五八六番

著作權所有

日本棋院刊行圖書

初學圍棊講義錄（六冊完結）
定價一冊一圓 送料四錢 六冊分 六圓 送料共

高等圍棊講義錄（十二冊完結）
定價一冊一圓送料四錢十二冊分十二圓送料共

日本棋院監修
圍棊手筋解 定價一冊 一圓五十錢 送料六錢

七段 瀨越憲作著
互先定石第一卷（一間夾、二間夾前半）
定價 一冊 一圓二十錢 送料 四錢

互先定石第二卷（二間夾後半、三間夾）
定價 一冊 一圓二十錢 送料 四錢

七段 瀨越憲作著
置棊定石項手篇（全一冊）
定價 一冊 一圓二十錢 送料 四錢

七段 岩佐銹著
互先布石詳解第一卷
定價 一冊 一圓二十錢 送料 四錢

七段 岩佐銹・七段 瀨越憲作共著
置棊布石詳解第一卷（九子七子の部）
定價 一冊 一圓二十錢 送料 四錢

置棊布石詳解第二卷（七子五子の部）
定價 一冊 一圓二十錢 送料 四錢

置棊布石詳解第三卷（八子六子の部）
定價 一冊 一圓二十錢 送料 四錢

置棊布石詳解第四卷（四子二子の部）
定價 一冊 一圓二十錢 送料 四錢

七段 瀨越憲作著
置棋定石大桂馬篇（全）
定價 一冊 一圓二十錢 送料 四錢

六段 加藤信著
碁聖秀策の布石（上、下）
定價 各一冊 一圓二十錢 送料 四錢

日本棋院監修
日本棋院段級錄（毎年一回一月發行）
定價 一冊 五十錢 送料 二錢

日本棋院特製
圍棊罫紙
甲種（美濃紙）一帖五十枚 八十錢 送料四錢
乙種（西洋紙）一帖五十枚 四十錢 送料八錢
丙種（西洋紙半截）一帖五十枚 二十五錢 送料四錢